

オンライン・デーティングにみる後期近代のコミュニケーション
ー ー性別役割、コンフルエント・ラブ、脱埋め込みの諸相ー ー

2024 年度 卒業論文

学籍番号 21SG1029

氏名 吉川 かりん

目 次

目次.....	i
---------	---

第1章 研究動機・問題の所在

1. 問題の所在.....	1
2. オンライン・デーティングとマッチングアプリの定義	2
2-1. オンライン・デーティング（Online Dating）の定義	2
2-2. マッチングアプリの定義	2
2-3. 本研究でのオンライン・デーティングとマッチングアプリの使い分け.....	2
3. オンライン・デーティングの仕組み	3
4. マッチングアプリ利用率の増加	3
5. 行政によるマッチングシステム	5
6. 若者の対人関係の現状	6
7. 研究動機と問題の所在	7

第2章 先行研究

1. 先行研究	9
1-1. 人間関係論.....	9
1-1-1. ジェンダー論	9
1-1-2. 恋愛・結婚論	10
1-2. インターネット技術論	11
1-2-1. 脱埋め込み(プライベート化).....	11
1-2-2. AI マッチング.....	11
1-2-3. 写真やプロフィールの評価メカニズム.....	12
1-3. リスク論	12
1-4. コミュニティ論	12
2. Bergström(2022:14-17)要約	13
3. オンライン・デーティングに関する基本調査.....	14
3-1. 「マッチングアプリ大学生質問紙調査」の内容	14
3-2. 「マッチングアプリ大学生質問紙調査」の基本的な分析.....	15

4. 本論文で扱う3領域の図示	15
-----------------------	----

第3章 オンライン・デーティングとジェンダー革命

1. デート規範の現在	17
2. 国別の考察 カナダにおける研究	18
3. マッチングアプリと性別役割に関する研究	19
4. 仮説	21
5. 質問紙調査 マッチングアプリ利用と性別役割規範	21
6. インタビューの概要	23
7. インタビュー分析① マッチングアプリ内での性別役割	24
7-1. インタビュー マッチングアプリ内の「いいね」、メッセージに関して	24
7-2. インタビューから	26
8. インタビュー分析② 対面の場合での性別役割	26
8-1. インタビュー お金の支払い	26
8-2. インタビューから	30
8-3. インタビュー 交際の申し込み	30
8-4. インタビューから	32
9. 結論	32
9-1. 仮説の検証	32
9-2. 考察	33

第4章 オンライン・デーティングとコンフルエント・ラブ

1. ギデنزの議論	34
2. ロマンティック・ラブとコンフルエント・ラブ	35
3. ロマンティック・ラブの持続	37
4. 仮説	39
5. インタビュー分析 マッチングアプリ利用者の意識	39
5-1. インタビュー マッチングアプリの利用動機	39
5-2. インタビューから	41
5-3. インタビュー 運命・ときめき	41

5-4. インタビューから	44
5-5. インタビュー 「ほかにもっといい人がいるかもしれない」	44
5-6. インタビューから	46
6. 量的分析(質問紙調査)	47
6-1. フックアップカルチャーの分散分析 (先行研究)	47
6-2. コンフルエント・ラブの分散分析	51
6-3. ロジスティック回帰によるコンフルエント・ラブに関する分析	54
6-3-1. 変数の変換	54
6-3-2. 「私は、現在の恋愛関係を、他のありうる関係と常に比べている。」の分析結果	54
6-3-3. 「現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係を いつも探している。」の分析結果	54
6-3-4. 「私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。」の分析結果	55
6-3-5. 分析結果	55
7. 結論	55
7-1. 仮説の検証	55
7-2. 考察	56

第5章 オンライン・デーティングと脱埋め込み

1. ギデنزらによる「脱埋め込み」の定義	57
2. Bergström による議論	58
3. 出会いの社会動向とオンライン・デーティング	59
4. 仮説	61
5. 量的調査 (質問紙調査)	62
5-1. 仮説2 恋愛ではない「ときめき」とは何か	65
5-2. 仮説2 「アプリを利用しなかったら出会えなかった人と出会える」という回答の 意味	66
6. インタビュー分析 マッチング・アプリ利用による脱埋め込みの効果	69
6-1. インタビュー 「普段では出会えない人と出会える」	69
6-2. インタビューから	72

7. 共同性の発見 砂川(2022)による	73
8. LGBT におけるオンライン・デーティングの普及率 Bergström による研究	74
9. 砂川氏へのインタビュー	74
10. 結論	76
10-1. 仮説の検証	76
 終章 考察	
1. 本研究の目的と結果	78
2. 本研究の意義	78
3. 本研究の問題点・課題	79
4. 今後の検討課題	79
 謝辞	 80
参考文献	81
注	85

第1章 研究動機・問題の所在

この章では研究動機、問題の所在、オンライン・デーティング（およびマッチングアプリ）の概要を述べる。

1. 問題の所在

2010年代以降、若者の性行動の経験率上昇が鈍化しており（林 2018）、人付き合いに関して現代の若者は深入りしない関係を築く傾向があるという（羽瀨 2016）。しかしそれに対して一定数の若者は恋愛を志向し結婚を望んでいる（社会保障人口問題研究所 2023）。こうした中で交際相手を見つける環境にも変化が起きており、学校や職場での出会いは減っている（社会保障人口問題研究所 2023）。それに対してネット系婚活サービスの利用は増えている（リクルートブライダル総研 2024）。

一方、マッチングアプリを含むオンライン・デーティング研究の重要性についても指摘がある。フランスの人口学者 Bergström は、マッチングアプリを含むオンライン・デートは現代を映し出す鏡だという（Bergström 2022:2）。オンライン・デートには生きている時代、新しい性規範や社会的結びつきの未来に対する希望、恐怖が映し出されると考えているからである（Bergström 2022:2）。

すなわち、マッチングアプリを含むオンライン・デーティング研究を行うことは、マッチングアプリが社会に及ぼす影響を明らかにするだけでなく、現代社会の性規範や人々の意識を明らかにすることにつながると考えられる。

本論文では、どんな人にマッチングアプリが利用されているのか、マッチングアプリはどのように使われているのか、オンライン・デーティングは現代の性愛や結婚のあり方を変えるのか。これらを考察する。それによって後期近代の親密性の変化した部分、変化しない部分を明らかにしたい。

2. オンライン・デーティングとマッチングアプリの定義

本論文では、オンライン・デーティング(Online Dating)という用語と、マッチングアプリ(matching app)という言葉を用いる。下線は筆者による。

2-1. オンライン・デーティング (Online Dating) の定義

The practice of using a computer network (in later use esp. the internet) to find and contact potential romantic or sexual partners, typically via a dedicated website or application; cf. internet dating *n.* (Oxford English Dictionary 2017)

(翻訳) 「オンライン・デーティングとは、コンピュータネットワーク (後のインターネット)を使用して、恋愛相手や性的パートナーの候補者を見つけ、コンタクトを取る行為のこと。通常は、専用のウェブサイトやアプリケーションを介して行われる。」

2-2. マッチングアプリの定義

「マッチングアプリ」は和製英語である。定義と概要を紹介する。

消費者庁の定義によると、マッチングアプリとは主にスマートフォンのアプリケーションを通して「恋愛や結婚等を目的とした会員同士をマッチングするサービスである(消費者庁 2021:3)」。会員は生年月日や性別、居住地といった自身のプロフィールや写真を登録した上で交際相手や結婚相手を自身で探したり、事業者からおすすめの相手を提示されたりする(消費者庁 2021:3)。従来の結婚相談所との大きな違いは、登録した会員自身でやり取りを行うという点である。結婚相談所サービスでは、担当のアドバイザーが相手を個別に紹介し、お会いのセッティングや交際に関するアドバイスを行う場合が多いが、マッチングアプリでは会員自身が相手を探し、デートの約束等も行う(消費者庁 2021:3)。

2-3. 本研究でのオンライン・デーティングとマッチングアプリの使い分け

オンライン・デーティングとマッチングアプリの定義を比べると、前者はインターネットを通じての恋愛・性愛・結婚の相手探しの行為のこと、後者は、オンライン・デーティングのメディア、主にスマートフォン上で動くアプリケーションとそれを取り巻くサービスを指す。以降は、行為をさす場合はオンライン・デーティングと呼び、アプリケーションとそれに付随するサービスを指す場合はマッチングアプリと呼ぶ。

3. オンライン・デーティングの仕組み

マイナビウーマン(2023)によると、マッチング・アプリの利用の流れは以下の通りである(マイナビウーマン 2023)。

- ① アプリをインストールする（男性のみ有料のことがある）。
- ② プロフィール・自己紹介文を作成する。
- ③ 気になった相手に「いいね」を送る。
- ④ 自分が「いいね」を送った相手が「いいね」を返してくる、または「いいね」をくれた相手に「いいね」することによって「マッチング（マッチ）」する。
- ⑤ メッセージを送る（電話や LINE の交換をする場合もある。）
- ⑥ デートに誘い、日程調整をする。
- ⑦ デートをし、自分または相手が承諾すると交際をする。

4. マッチングアプリ利用率の増加

マッチングアプリの利用率は増加傾向にある。消費者庁によると、ネット系婚活サービスの 2021 年の利用率は 21.8%で、過去最高となった(消費者庁 2021:4)。また、20 代～40 代の男女へのマッチング利用に関するアンケートでは、現在マッチングアプリを利用しているのは 20 代が 12.3%、30 代が 8.4%、40 代が 3.6%となった(消費者庁 2021:14)。ここから若い世代ほど利用状況が高い傾向があることが読み取れる。

さらに、マッチングアプリの利用によって交際に結びつく割合も近年上昇している。リクルートブライダル総研の婚活実態調査 2023 によると、恋愛もしくは結婚意向がある恋人のいない 20～40 代独身者における婚活サービス利用者で恋人ができた割合は 49.5%で過去最高を記録している(リクルート 2023)。また、2022 年の婚姻者のうち、婚活サービスを通じて結婚した人の割合は 15.4%となっており、その内訳ではネット系婚活サービスを通じて結婚した割合が最も高かった。特に 2022 年における婚活を通して結婚した人の出会いでは、婚活サイトの割合が最も高い(リクルート 2023)。

ここから婚活サービスは近年利用者が増加していることがわかる。さらに、婚活サービスを利用した婚姻者は15%となっており、近年は婚姻にも大きく関わっている。このことから、マッチングアプリ利用は恋愛だけでなく、結婚にも大きな影響を与え始めている。

日本におけるマッチングアプリの有力な業者はつぎのようになっている。

2022年のインタビュー複数回答有（使用者20人）（高橋・石原・鬼頭・山田2023）

- ① タップル 13人（65%/20人） 2014年から累計1,700万人以上が利用
- ② Tinder 12（60%） 2012年から190か国 40以上の言語で7,500万人以上利用
- ③ ペアーズ 7（35%） 2012年から累計2,000万人以上利用。
- ④ with 5（25%） 2014年から累計800万人以上利用。

2023年の質問紙調査複数回答有（263人中60人がアプリ使用者）

- ① タップル 32人（53.3%/60人）
- ② Tinder 26（43.3%）
- ③ with 22（36.6%）
- ④ ペアーズ 19（31.6%）
- ⑤ Omiai 3（5%）

2022年調査も2023年調査も20代前半の学生を中心としたものである。どちらも選択肢に入れた18の利用アプリのうち、上位4つが圧倒的に多いことがわかっている。

真剣な交際相手を探すときのメディアとしては、with > ペアーズ > タップル > Tinderといわれている（高橋・石原・鬼頭・山田2023）。つまりTinderは遊び度の高いフックアップカルチャーのメディアとして知られている。

5. 行政によるマッチングシステム

マッチングアプリの利用率や認知率の高まりを表す事例として、東京都のマッチングアプリの施策を挙げる。2023年12月に東京都がAIマッチングシステムの提供を開始すること

を発表した(朝日新聞 2024 年 6 月 4 日)。東京都の運営するマッチングアプリ「TOKYO ふたり STORY」は 2023 年からテスト運用が行われ、2024 年夏にも民間業者に運営委託を行い本格的に実用化した。

この「TOKYO ふたり STORY」には 3 つの特徴がある。

まず 1 つ目は AI による紹介である。マッチングシステムの利用開始時に利用者は価値観診断テストを行う。このテストからわかる「あなたの価値観」と「あなたがお相手に求める価値観」をもとに、AI が相性の良い人を紹介するというものだ。このシステムにより見た目や条件だけでは測れないものと思わぬ出会いをもたらす可能性をあげている。また、自分に合った人と出会えるかという心配を払拭する手段ともなっている(東京都 2025)。

次に安心な出会いができるという点である。このマッチングシステムの会員登録には独身証明書や本人確認書類などの提出が必須となっている。そのため、安心した環境で相手探しができるとしている。また、連絡先を交換しないでお見合いをすることも可能で、真剣に結婚を考えている人と出会いたいというニーズに応えている(東京都 2025)。

最後にスタッフによる相談支援制度である。このマッチングシステムではスタッフが相談に乗ってくれるというサービスがある。この制度ではスタッフがオンラインで婚活のお悩みや心配事気軽に相談できるため、婚活が初めてなど不安要素を払拭してくれる(東京都 2025)。

このようにマッチングアプリは行政が未婚化晩婚化の課題に取り組む際にも利用される施策としても機能していることがわかる。また、「TOKYO ふたり STORY」の 3 つの特徴から、行政の取り組みとしてマッチングシステムが利用される際には「安心」な出会いという部分が重要視されていることが読み取れる。これはマッチングアプリを利用することによる不特定多数との出会いの危険性を防止するものと考えられる。

6. 若者の対人関係の現状

羽瀧は『21 世紀初頭の若者の意識』の中で現代の若者の人間関係やインターネット上のコミュニティの意識について述べている。ここで羽瀧は 1992 年、2002 年、2012 年の青少年研究会の調査を利用し、比較分析をしている。

まず人付き合いに関しては、現代の若者は深入りしない関係を築く傾向にある。羽渕によると、友人との付き合いについて「あっさりしてお互いに深入りしない」という若者は、2012年に増加している(羽渕 2016:31)。また、「友人(友だち)」というより、一人でいる方が気持ちが落ち着く」という項目については、1992年時点でも男性の方に肯定的な意見が多かったが、その差は2002年、2012年と現在に近づくほど、広がってきた(羽渕 2016:31)。このことから、現代の若者は深い人間関係を望まず、淡泊な関係性を好むことが考えられる。

次にインターネット上でのコミュニティへの意識についてである。親友と知り合った場所に関する質問項目では「学校や職場以外の習い事やサークル活動で」や「インターネットや携帯電話のサイトで」といったボランタリーな活動場所が2002年よりも増大している(羽渕 2016:32)。ここから、学校や職場のように決められた環境だけでなく、自身で選択する環境での友人作りが増えていることが読み取れる。また、インターネットも他のオフラインの出会いと同じように増大していることから、インターネット上のコミュニティも現代の若者には受け入れられていると考えられる。

さらに、現代の若者の特性として緩やかな恋愛が挙げられる。羽渕によると、2002年の調査では、恋愛交際相手に対して情熱的な感情を持っているかどうか、複数恋愛の経験があるかどうかという点について分析を行なっている(羽渕 2016:33)。この調査によって、交際相手のいる若者のうち4人に1人しか情熱的な感情を持っていないことが明らかになった。また、複数恋愛の経験が約3割に達することがわかった。ここから緩やかな恋愛が現代の若者の特性と検証している(羽渕 2016:33)。このことから、現代の若者は恋愛に対して情熱的な感情を持っていない傾向があり、緩やかな恋愛をする特性が見られる。また、1対1での交際ではなく、複数人と関係を持つ複数恋愛の経験が3割にのぼることから、羽渕の述べているように緩やかな恋愛や気軽な交際が好まれる傾向があると読み取れる。

7. 研究動機と問題の所在

このように現代の若者は友人関係、恋愛関係共に深い関係を必ずしも望んでいないものが増加しているといわれる。一方でコミュニティ形成の幅は広がっており、インターネットでの交流も受け入れられている。この中で、若者のマッチングアプリの使用が伸びている。これは特定の若者だけなのだろうか。

親密な人間関係は、社会の変化、メディアの変化にどう対応してどう変化しているのか。このことについて、オンライン・デーティング研究という視点にとどまらず、マッチングアプリを介して恋愛関係から友人関係までといった広い視点で若者の関係性の研究を行う。特に先行研究（第2章）から抽出した3つの事象（ジェンダー革命の停滞、コンフルエント・ラブ、脱埋め込み）を中心に議論する。

第2章 先行研究

要約（第2章）：社会科学における先行研究を整理する

1-1. 人間関係論

1-1-1. ジェンダー論

ホックシールド(1989)の「ジェンダー革命の停滞」はオンライン・デーティングにおいて打破されか？

1-1-2. 恋愛・結婚論

ギデنز(1995)の後期近代の恋愛（コンフルエント・ラブ）はオンライン・デーティングにおいて強まるか？

1-2. インターネット技術論

1-2-1. 「脱埋め込み」(Giddens) (Bergström)

今までの関係から脱したところでの出会いが可能にするものは？

1-2-2. AI マッチング論

選択肢を事実上無限に提供することが、「恋愛の砂漠」を導くか？

1-2-3. プロフィール論

どのような変数が相手を選ぶのに有効なのか？

1-3. リスク論

匿名空間でのコミュニケーションの問題は？

1-4. コミュニティ論

このうち、本研究では1-1-1（3章）、1-1-2（4章）、1-2-1および1-4（5章）を取り上げる（その理由は本文中で述べる）。

1. 先行研究

オンライン・デーティングとマッチングアプリに関する社会科学の先行研究は、次のようにおよそ4つにわけられる。人間関係論、インターネット技術論、リスク論、コミュニティ論である。

1-1. 人間関係論

マッチング・アプリというメディアが人間の意識にどのような影響を与えるのかを考察する研究である。

1-1-1. ジェンダー論

オンライン・デーティングが「ジェンダー意識」に与える影響を考察したもの。これには肯定的なものと否定的なものがある (Schmitz 2023)。

・ジェンダー意識を望ましいほうに変えようとする議論：

Cooper and Sportolari(1997:7)は、オンライン・デートは「男性も女性も、典型的な性別役割分担規範から、より自由に逸脱することを可能にする」と述べている。

また Hakim(2013)は、オンライン・デーティングのプラットフォームは、女性が交渉力を高めるために「エロティック・キャピタル」に投資する手段であり、女性の解放のための手段となるととらえている。これは性別役割そのものを内面化しているのではなく、男性からみた女性の美を自覚的に使用する、女性の側の自省的（戦略的）な態度であるという。

・否定的な議論（ジェンダー意識に影響がないとする）議論：

この「性別役割分担規範からの解放」については、いくつかの理由から疑問を投じる研究がある (Bergström 2022) (高橋・石原・鬼頭・山田 2023)。また、中国において「女性がアプリ上で男性を見る時など、マッチングアプリを使って女性が家父長制に抵抗する様子については既に述べたとおりであるが、筆者の研究では、女性が家父長制に抵抗するの

と同じやり方で、男性がマッチングアプリ上で女性をモノ化する事象も多数みられた」(チャン 2022:21)などの報告もみられる。ジェンダー論について本論文の論証は第3章で行う。

1-1-2. 恋愛・結婚論

肯定的なものとしては「インターネットの力を活用することは、社会の恋愛幸福度を向上させる有望な手段である」と述べるのは Finkel(2012:49)である。同様に「サイバースペースは、人々が人間関係とセクシュアリティについて経験し、学ぶためのユニークな環境を提供する」(Whitty 2008:1837) という議論もある。

特に Giddens (1995)の主張する、親密性の変容、すなわちロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへの変化が、オンライン・デーティングにおいてさらに強まるという仮説が重要である。羽瀧(2023)は、Giddens のいう「コンフルエント・ラブ」「純粋な関係性」こそがオンライン・デーティングの本質であるとしている。

石田 (2023) は、東大社研若年・壮年パネル調査を用いた分析で、パートナー探索に関する技術革新が、現代日本の若者、特に高学歴の女性の間で、より平等な結婚を選択することを可能にしていると結論づけている。

以上の肯定的な予測に対して、オンライン・デーティングは恋愛や社会に対してネガティブな影響があるとする研究も少なくない (Lawson and Leck 2006)。さらに「冷たい親密性」などの概念で、恋愛の資本主義化につながるとする議論が有力である (Illouz 2007:5)。

(1-b)については、本論文第4章で扱う。重要な新しい指摘は、コンフルエント・ラブの進展だけでなく、ロマンティック・ラブの残存がみられることである。

Cherlin(2020)の主張によれば、結婚の役割は変わり結婚は成功のシンボルようになっており、結婚が成功する理由は、相手との信頼を高めるためである。すると、コンフルエント・ラブは不安定だということになる。結婚の合理性は特にアメリカでは Giddens が考えるよりもはるかに高くなっている。情緒的満足度が結婚において重要になる傾向は日本でもある (山田 1996)。

1-2. インターネット技術論

インターネット上のアプリというメディアの特性に注目する研究である。

1-2-1. 脱埋め込み（プライベート化）

Bergström(2022)がマッチングアプリの最も重要な特徴としているのが、脱埋め込みである。これ Karl Polanyi が経済学の文脈で提唱したものを Giddens(2010)が社会学に拡張したものである。「社会的関係がローカルな文脈から引き離され、より広範な時間と空間の中で再構築されること」とされる(Giddens 1993:35-36)。マッチングアプリの特徴は、交際・恋愛・配偶者選択が、学校や職場、近隣から切り離されて、自分の部屋でアプリによっておこなわれることであり、Bergstrom はこれを「脱埋め込み」そしてより具体的に「プライベート化」とよぶ。これに関しては、本論文第5章で扱う。プライベート化がどのようにわれわれの恋愛・交際・配偶者選択に影響を与えるかを問う。

1-2-2. AI マッチング

マッチングアプリはAIによるマッチングを実施しているものが多い(Pairs が早い) AIを用いたマッチングは「選択の技術」(Illouz 2007, 2012)として登場しており、社会科学や哲学においてはその評価は分かれている。Turkle(2011:xii)によれば、「こうした技術は、人間関係を築く方法であると同時に人間関係から身を守る方法」になっている。

AI アプリが人間の選択性、自律性を壊して刹那的な「偽物の愛」を作り上げるという意見には反論も多い。Hobbs et al. (2016)によれば、マッチングアプリの利用目的の質問では、55%が「主にデートの相手を探すため」と回答し、「主に性的な出会いを探すため」と回答した人は25%だった。またアプリを利用してから一夫一婦制の関係を求める傾向が「弱まった」のは14%にすぎず、72%は変化がなかった。つまり多くのアプリ使用者は必ずしも短期的な恋愛目的ではない。オンラインデーティングは短期的な恋愛と長期的な恋愛のどちらが亢進するのか。

1-2-3. 写真やプロフィールの評価メカニズム

写真や、性別・年齢を含む数十項目のプロフィール（自己紹介文も含む）がマッチングアプリにおいて恋愛・性愛・配偶者選択に使用される。例えば山田・佐藤・鬼頭（2022）は、自己紹介文を分析して、オンラインでは自己高揚的自己呈示が行われるとすることを示す。選択の変数と人格類型の関係の調査などが盛んにおこなわれている。

1-3. リスク論

「日本では、オンラインで異性と出会うことについて、ポジティブなイメージを持っている人は少数である」（金子 2017）。原口・竹鼻（2019）のように大学生のアプリのリスク認知の研究もあり、いずれも安全性についてはやや否定的な結論を出している。

しかし反面、急激に制度化は進んでいる。「出会い系サイトは平成 20 年の出会い系サイト規制法の改正に伴い、事業者による届出や年齢確認、投稿されるテキストや画像の確認体制を強化したことにより、安全に利用することができる環境が整備された」「Pairs も（中略）各種届出や年齢確認を行い、ユーザーから投稿されるテキストや画像に違反している点がないかを確認するため、投稿監視システムを構築し、内部に機械学習で学習させた分類器を用意して、投稿されるテキストと画像をフィルタリングしている」など、使用者のリスクに対する対応について言及する論者もいる（金子 2017）。

1-4. コミュニティ論

マッチングアプリの使用目的が、性愛や恋愛目的ではなく「友人づくり」も多いことは 5 章で述べるがいくつかのデータから明らかにされている。

またゲイアプリの使用者からは、性愛・恋愛とは別のコミュニティの生成が報告されている（砂川 2023）。これについても 第 5 章で述べる。

2. Bergstrom(2022:14-17)要約

以上の先行研究の中で特に本研究に関わりが深い Bergström の著作の要約を示す。本論文は多くをこの著作に負っているが、フランスと日本という文脈の違いだけでなく、いくつかの重要な点で相違がある。なお、傍線は筆者による。

本書の第1部はプライベート化の分析：オンライン・デーティングの歴史的観点と、それが引き起こす変化について述べる。

Chapter1. マッチングのサービスは欧米で歴史が長い。最初の結婚紹介所や個人広告
は19世紀に登場し、コンピューター・デーティングの形態は1950年代、マッチメイキン
グシステムの最初のネットワークはその数十年後に登場した。初期のサービスと今日のデ
ジタル・プラットフォームの間に強いつながりがある。19世紀はじめから親密な関係を崩
壊させると批判されてきており、親密性の商品化は後期資本主義の特徴ではない。

Chapter2. 一連の出会い系サイトやアプリの創設者へのインタビューをもとに、これら
のプラットフォームに影響を与え、その制作物を決定づける社会的・職業的規範を明らか
にする。

Chapter3. 各国の調査を用いて、利用者数とネットで出会うカップルの割合について概
観する。オンライン・デートが成功しているのは、性的領域と社会的領域を分離している
ためである。オンライン・デートはカジュアルな（刹那的な）出会いである。この一般的
な認識は、メディアによって喧噪されるが、科学的な事実でもある。

Chapter4. オンラインで始まった関係は急速に性的なものになり、短期的なものになる
ことが多い。これは、規範の根本的な変化が理由とされるが、本書では文脈の変化と考
える。オンライン・デートは、プライベート化という観点から理解されなければならない。
さらに言えば、オンライン・デートはカップル成立の妨げにはならないし、コミットメン
ト恐怖症を暗示するものでもない。実はカップル規範は相変わらず強固だが、コミットメ
ントの方法が変化しているのである。

本書の第2部では、デートにおける不平等について考察している。オンライン・デート
でも同じだが、特に親密な領域にみられる差別、偏見、不公正があらわれる。

Chapter5. では、オンライン・デートにおける、釣り合いのとれたもの同士のマッチン
グ（assortative matching）を調査する。高度に標準化されたプラットフォームでも、ユー
ザーの行動における社会的差異はあるし、オンライン上の関係が同質的になることもあ
る。ユーザーは、自分と似た社会的環境の人々と交流する傾向がある。このような社会選
択は、アルゴリズムやあらかじめ定義された嗜好によるものだけではなく、むしろ階級的
気質や文化的前提条件（ブルデュー）の結果である。オンライン・デートは、社会的多様

性からフォーマルな障壁のいくつかを取り除くものであるからこそ逆に、今日の社会的ヒエラルキーの強さを明らかにする。

人々をパートナーとしてマッチングさせるために特別にデザインされたとはいえ、出会い系プラットフォームには勝者と敗者がいる。

Chapter6. によれば、出会い系プラットフォームは、そのプロセスから排除される人々がいることを示す。出会い系サービスは、女性にとっても男性にとっても性的探求の場であるが、インターネット上での交流もまた、ジェンダーに大きく左右される。

Chapter7. では、伝統的な性別役割がネット上でも再現されていることに注目する。

結論は、オンライン・デートは、社会生活のより大きなプライベート化の原因であると同時に結果でもある。公的な社交の場が減少し、それに伴って新しい出会いの機会も減少したため、出会い系プラットフォームは、身近な人以外でパートナーを見つけたいと願うユーザーを惹きつけている。しかし、20 世紀初頭の舞踏会のように、新たな公共の出会いの場をつくるではなく、オンライン・デートはパートナーとの出会いをこれまで以上にプライベート化し、孤独で深い個人的な問題に変えている。

3. オンラインデーティングに関する基本調査

3-1. 「マッチングアプリ大学生質問紙調査」の内容

以下の調査のデータを、調査設計者の許可により、本論文の分析に利用した。

調査日：2023 年 7 月 対象：明治学院大学社会学部の授業履修者

人数：263 名（男性 55 名、女性 195 名、性別不詳 13 名）

有効回答数：263 件 分析回答数：250 件

調査設計者：石原英樹先生（明治学院大学）、鬼頭美江先生（明治学院大学）、高橋幸先生（石巻専修大学）、山田順子先生（立正大学）

3-2. 「マッチングアプリ大学生質問紙調査」の基本的な情報

「マッチングアプリ大学生質問紙調査」によるとオンライン・デーティング利用経験ありと答えたのは全体の 22%に当たる 57 名であった。オンライン・デーティング利用経験ありと回答したうち男女の内訳は男性が 11 名、女性が 46 名という結果になっている。

この分析に関して、以後「石原らによる 2023 年データ」と呼ぶこととする。

本稿における以後の質問紙調査は、この「石原らによる 2023 年データ」を利用し、分析を行う。

4. 本論文で扱う 3 領域の図示

先行研究のうち、特に「後期近代の親密性の変容」に関わると筆者が考える 3 つのトピックについて本研究の 3 章～5 章で扱う。これらは、2 章の先行研究と Bergström(2022)をもとに、オンライン・デーティングが性愛（や性愛でないものも含む）そして親密性にどのような影響を与えているのか、それぞれ複数の仮説が存在しているトピックである。

以下では質問紙調査とアンケートをもとに、これらの仮説の検証を行う。この分析はまた、初めに提起した社会課題への有益な示唆があると考えられる。

3 章「ジェンダー革命の停滞」(1-a)はホックシールド（1990）で提起された。女性の権利がみとめられジェンダー不平等が解消されたかにみえた 1980 年代以降、子どもをもつ女性は職場のシフトの延長で家事労働を不平等的に行っていることを指摘した書である。オンライン・デーティングはこの状況を変えうるのか否か、という議論の対立がある。

4 章「親密性の変容」(1-1-2)はギデنز（1995）により唱えられた、近代の結婚や恋愛が流動化しているという報告に関する議論である。ギデنزがいうように近代恋愛はコンフルエント・ラブに単線的に変化していくのか。

5 章「プライベート化」(2-1-1)はギデنزや Bergström(2022)らの議論を扱う。性愛のプライベート化は性愛を盛んにするのか、どのように変えるのか。また意図せざる結果があるという報告も検討する。

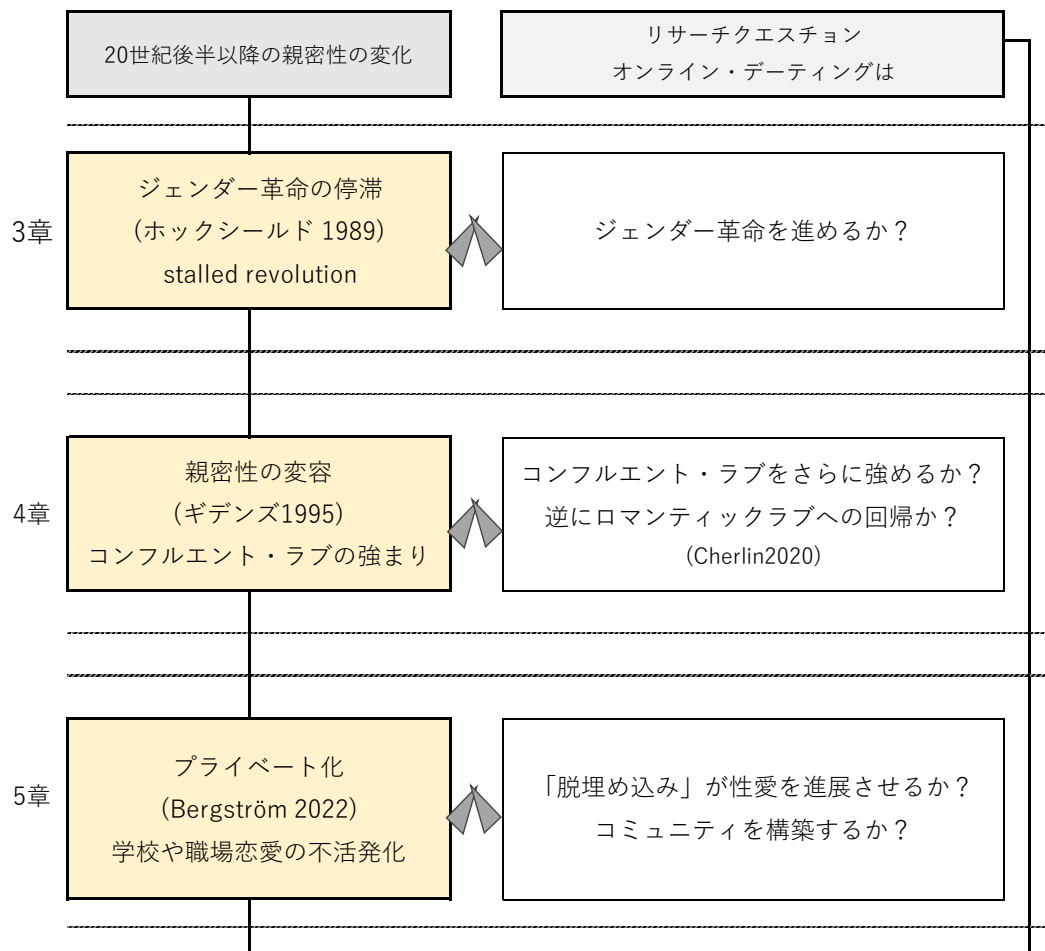


図1 本研究で取り上げる3領域とリサーチエスチョン

(出典) 筆者作成

第3章 オンライン・デーティングとジェンダー革命

本章の要約：「ジェンダー革命の停滞」に対して、オンラインコミュニケーションにおいて、ジェンダー意識（性別役割など）はみられなくなる傾向にあるのか。それともジェンダー意識は変わらないのか、逆に深まっているのか。

オンライン・デーティングを肯定的にみる立場の論者は、ジェンダー意識は減少傾向にあるという。そこで本章ではジェンダー意識の変数として、デートにおける「割り勘」をとりあげ、質問紙調査とインタビューにおいて実態を調べた。

そもそもの現在の若者の「デート規範」を記述した上で、それがオンライン・デーティングではどのような変化をもたらすのか／もたらさないのかを明らかにしようと試みた。

その結果は先行研究のとおり、男女でのジェンダー意識差がみられた。だがオンラインにおいてジェンダー意識が弱まるという知見は見出されなかった。

逆にオンライン・デーティングにおいては男性のみ課金をする企業が多く、構造的に男性主体のコミュニケーションが強化されている側面もある（マスキュリン・テクノロジー）。

1. 「デート規範」の現在

ジェンダー意識のうち、性別役割に関する操作的定義として「デートにおける支払い」をとりあげる。

デートでは男性が奢らなければならないという「デート規範」と言えるものは、浸透しているのだろうか。

日本社会では、男女関係において、「デート代は男性が支払うべき」「告白するのは男性から」などの「昭和時代の慣習」であるジェンダー・ステレオタイプが強く残っているとされる(泉 2021)。しかし単純に規範が内面化しているというわけではない。名和田(2006)では「デートの時のお金を出すのは割り勘」が意識調査では大多数なのに、男性は「自分がお金を払う」女性は「相手が払う」と報告している。従来の規範は、男性の収入

が相対的に高かったからだが、男性の給料が相対的に下がったので、古い規範に対して納得できない男性も増えているという。この齟齬にはどのような意味があるのか。

青少年研究会(2024)「現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明」によると、「恋愛場面の性別役割規範（男性がデート代を多く払うべきだ、男性が女性に交際を申し込むべきだなど）に否定的であるにも関わらず、実際には、デート代を支払ったり、告白をしたりという性別役割行動を取る男性が一定」いるという。つまり規範と実際の行動には齟齬があるということである。

さらに、性別役割規範は従来、結婚や子育てにおいて観察されてきたが、それ以前の恋愛においてどのようにみられ内面化しているのかという問いが立てられる。木村(2024)が報告する研究では、高校生と大学生はセックス時などには男性が女性をリードすべきだという規範を取る者が多く、こうしたイニシアチブを指向する男性ほど家事育児規範についても性別役割に適応しているという（永田 2013）

木村(2021)によれば 1980 年代以降の若者向け雑誌などの恋愛マニュアルでは、女性の役割は外見的要素、男性の役割は、デートなどの二人の関係をリードすることである（当然奢りか多めに払う）。すなわち奢り／ワリカンが女性側の関係を進めることへの意思確認のサインとなっている。すなわち規範の内面化というよりも、ある種の再帰的な意味を持っているということである。

2. 国別の考察 カナダにおける研究

これは日本特有の慣習である可能性もある。そこで他国の例をみてみよう。カナダの社会学者 Wu et al.(2023)は、ノース・カロライナ州のウィルミントンに住む異性を恋愛対象とする 552 名の大学生にデート代の支払いについて尋ねている。具体的には、男性と女性のどちらがデート代を払うべきだと思うかだけでなく、実際にどちらがデート代を払ったかについても問うている。

結果として、初めてのデートで男性（男子大学生）の側がデート代を全額ないしは相手より多めに払ったというケースが全体の約 9 割に上り、女性（女子大学生）の側が全額ないしは相手よりも多めに払ったというケースは約 2%にとどまっている（残りの約 8%は

割り勘)。二回目以降のデートになると、割り勘にするケースが増えるものの、それでも大半のケースで男性がデート代を全額ないしは相手よりも多めに払った。男性と女性のどちらがデート代を払うべきだと思うかについては、男性の80%近くが「初デートでは男性がデート代を払うべき」と考えている一方で、同様に（「初デートでは男性がデート代を払うべき」と）考えている女性は半数（55%）という結果になっている。日本の例と同様に、性別役割についての考え方の違いは、どちらがデート代を払うべきかについて大して意見の違いを生まない。ルオらが聞き取り調査を行った男女のどちらの大学生も、性別役割について保守的であろうと進歩的であろうと、「男性がデート代を払うべき」と考えている。

この日本とカナダの事例から推測されるのは、恋愛において性別役割への反対はかなりの人数でいるが、実際の対称的場面では、しばしば男性が支払いを多くするなどの非対称的な、性別役割と一見みえるような行動がかなりみられるということである。

このように、対面での性別役割にみえる行動の残存が、オンライン、特にオンライン・デーティングにおいてどのようになっているのか。特に、奢る／ワリカンはどのような状態であるのか、先行研究および調査データから述べてみたい。

3. マッチングアプリと性別役割に関する研究

高橋らは、オンライン・デーティングの構造によって、非対称な性別役割が強いられているとしている。男性ユーザーは本格的にオンライン・デーティングを利用する場合、課金する必要があり、女性は課金せずに十分使える(高橋・石原・山田・鬼頭 2023)。そのため、男性の方が主導的に活動することが多い。「いいね」やメッセージは男性の方から送ることが多いとしている(高橋・石原・山田・鬼頭 2023)。

オンライン・デーティングは男性リーダーシップ役割と女性受動的役割を組み込んで成り立っており、これを強化している。オンライン・デーティングを利用する以上この性別役割を踏襲したふるまいが要求されるという点で大きな影響がある。さらに、男性からメッセージを送ったり誘ったりすることが「マナー」として一般化している(高橋・石原・山田・鬼頭 2023)。これは、日本の大手異性愛オンライン・デーティングにおいて、男性の

みに課金を義務付ける構造が原因となっているため、この構造の是正が必要となる（例外は Tinder である）。

フランスの人口学者 Bergström は、リアルのデートの規範がそのままオンライン・デーティングで用いられているという。これは Cooper and Sportolari(1997)らの主張とはことなり、日本と同様にオンライン・デーティングの課金システムが男女で不均等であることなどが原因であるとされる(Bergström 2022)。

「有料顧客である男性を惹きつけるためには、女性に対応しなければならない。(中略) 男性が女性とのデートにお金を払うのは、デジタルの世界に限ったことではない。飲み物、食事、花、映画館のチケットなどにお金を払うことは、伝統的に、デートの際に男性のパートナーに義務付けられている。贈り物として考えられてはいるが、これらの物は、女性のセクシュアリティへのアクセスをカウンターギフトとする交換の一部を形成している。(Bergström,2022:55-56)」

「この女性の期待は、深い非対称性を示している。メリッサは男性に会話の主導権を求め、“最初から最後まで”の主導権を握ってもらう。彼女自身はまだ学生だが、パートナーには“人生経験”が必要なのだ。このような関係のシナリオは、『相互性の実質的な要素なしには存在し得ない（純粋な）関係』（Giddens,1992,p.93）という現代のカップルのイメージとはかけ離れている。アンソニー・ギデنزが描く理想的な関係は、多くの若い女性の語りがとらえるような、男性が主導権を握ってパートナーの世話をすることを期待される関係よりも、はるかに対称的である。[Giddens の理論とは異なり]男性が主導権を握り、女性を守り、女性のニーズに応えるという、この伝統的なカップル像の永続的な力には驚かされるものがある。(Bergström,2022:129)」

このように Bergström は、Giddens の主張する新しいパートナー像（本論文 4 章）に比べて、オンライン・デーティングで行われているやりとりでは、性別役割が色濃くみられるという。

もう一つ注目されるのは、フランスと日本で共通しているのは、オンライン・デーティングのシステム提供側に男性が多いこと、マスキュリン・テクノロジー（浅井 2008）というべきものがみられることである。作り手の男性優位、男性のみ課金するというプラットフォームが前提となっている。

4. 仮説

先行研究から今回以下の仮説を立てる。

仮説 オンライン上では性別役割が弱くなる。特に女性の性的自主性が強まる。

5. 質問紙調査 マッチングアプリ利用と性別役割規範

そもそも、性別役割の意識はマッチングアプリを使っている人とそうでない人とは差があるだろうか。

まず、2023 年の「アプリ大学生質問紙調査」（詳細は第 2 章）からオンライン・デーティング利用経験有無による性別役割規範の違いを検証する。

性別役割規範の差を検討するために設問 11.結婚観・家庭観などから「④どんな社会においても女らしさや男らしさはある程度必要である」と「⑤少なくとも子供が小さいうちは、母親は仕事を持たず家にいるのが望ましい」の 2 項目を利用する。

まずマッチングアプリ利用有無（アプリを現在使っている人とアプリを過去に使っていた人の合計を、アプリ利用者、それ以外をアプリ利用者でないとした）と「④どんな社会においても女らしさや男らしさはある程度必要である」（1 全く当てはまらない 2 当てはまらない 3 あまり当てはまらない 4 やや当てはまる 5 当てはまる 6 非常に当てはまる）のクロス表とカイ 2 乗検定の結果は以下の通りである。ここでカイ 2 乗検定に注目する。Pearson のカイ 2 乗検定による有意確率は 0.516 となっており、有意差はなかった。

アプリ利用の有無 と 女らしさ男らしさ必要 のクロス表									
			女らしさ男らしさ必要						
			1	2	3	4	5	6	合計
アプリ利用の有無	アプリ経験あり	度数	5	7	16	21	7	4	60
		アプリ利用の有無 の %	8.3%	11.7%	26.7%	35.0%	11.7%	6.7%	100.0%
	アプリ経験なし	度数	17	29	43	68	40	6	203
		アプリ利用の有無 の %	8.4%	14.3%	21.2%	33.5%	19.7%	3.0%	100.0%
合計		度数	22	36	59	89	47	10	263
		アプリ利用の有無 の %	8.4%	13.7%	22.4%	33.8%	17.9%	3.8%	100.0%

表1 マッチングアプリ利用有無と女らしさ男らしさは必要のクロス表

(出典) 筆者作成

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	4.236 ^a	5	.516
尤度比	4.182	5	.524
線型と線型による連関	.002	1	.968
有効なケースの数	263		

a. 1セル(8.3%)は期待度数が5未満です。最小期待数は2.28です。

表2 マッチングアプリ利用有無と女らしさ男らしさは必要のカイ2乗検定

次にマッチングアプリ利用有無と「⑤少なくとも子供が小さいうちは、母親は仕事を持たず家にいるのが望ましい」のクロス表とカイ2乗検定の結果は以下の通りである。

Pearson のカイ2乗検定による有意確率は0.153となっており、これも有意差はなかった。

アプリ利用の有無 と子ども小さいなら母親は家に のクロス表									
		子ども小さいなら母親は家に							
		1	2	3	4	5	6	合計	
アプリ利用の有無	アプリ経験あり	度数	7	7	22	18	5	1	60
		アプリ利用の有無 の %	11.7%	11.7%	36.7%	30.0%	8.3%	1.7%	100.0%
	アプリ経験なし	度数	32	44	46	54	16	11	203
		アプリ利用の有無 の %	15.8%	21.7%	22.7%	26.6%	7.9%	5.4%	100.0%
合計	度数	39	51	68	72	21	12	263	
	アプリ利用の有無 の %	14.8%	19.4%	25.9%	27.4%	8.0%	4.6%	100.0%	

表3 マッチングアプリ利用有無と子供が小さいうちは、母親は家にいるのが望ましい

のクロス表 (出典) 筆者作成

カイ 2 乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	8.067 ^a	5	.153
尤度比	8.442	5	.133
線型と線型による連関	.327	1	.567
有効なケースの数	263		

a. 2 セル (16.7%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.74 です。

表 4 マッチングアプリ利用有無と子供が小さいうちは母親は家にいるのが望ましい
のカイ 2 乗検定 (出典) 筆者作成

以上の結果から、今回の調査票調査では性別役割規範に関する設問においてマッチングアプリ利用有無による有意差はなかった。マッチングアプリを利用することでジェンダー規範が緩むかどうか、一概には言えないということである。

6. インタビューの概要

オンライン・デーティング内に性別役割は存在するのか、存在するとしたらどのような形をとっているのか。対立する構造に関して、日本の文脈で見ていく。今回インタビュー調査をもとにした分析を行うこととする。

インタビュー回答者の属性やアプリの利用目的は以下の通りである。2024 年筆者と石原英樹教授によって半構造化インタビューを行った。この際、回答者には Amazon ギフト券 2000 円分を謝礼として支払った。なお、以降の章に記述するインタビューも以下のインタビュー回答者から得た内容を抜粋したものである。

表記名	ジェンダー	年齢	職業等	アプリ以前の実験経験	アプリを通じた実験経験	アプリ利用目的
a	女性	23	会社員	なし	なし	恋人探し
b	女性	21	大学生	あり	1人	恋人・結婚相手探し
c	男性	27	会社員	あり	1人 (結婚)	恋人・結婚相手探し
d	男性	30	会社員	あり	4人	恋人・結婚相手探し
e	男性	31	会社員			恋人探し
f	女性	28	会社員			恋人探し
g	女性	37	自営業	あり	1人 (結婚)	結婚相手探し (再婚)
h	男性	21	学生	なし	1人	恋人探し
i	女性	23	会社員	あり	1人	恋人探し

表5 インタビュー回答者の基礎情報 (出典) 筆者作成

マッチングアプリ内での「いいね」機能、チャットでの行動について性別役割規範は存在するのかインタビュー内容から分析する。下線は筆者によるものである。

7. インタビュー分析① マッチングアプリ内での性別役割

7-1. インタビュー マッチングアプリ内の「いいね」、メッセージに関して

a さん (女性・会社員)

質問者：アプリで具体的にどういうリアクションをしているかっていうのを伺いたいんですけど。(中略)

a：まず、私から「いいね」を送るってことがほとんどなくて、向こうから来た「いいね」に対して自分もいいと思うか思わないかっていうのをまずやるのと、結局アプリって女性が少ないので毎日一定数「いいね」が届くような仕組みにはなっている気がしていて、それを毎日良い悪いとかやって、その後はマッチしましたってなった後に、その中でも何人かから「マッチありがとうございます」みたいな連絡が来たりとか、個人的に自分でも結構いいなと思っていたら、自分がマッチしたタイミングで「『いいね』ありがとうございます」っていうメッセージを送って、そのメッセージが向こうから返信があったらもうちょっと進めていくっていう感じでした。

質問者：この「いいね」は、自分から送る機会がないっていうことだったんですけど、マッチしてから連絡する場合は自分ですることなんですけど、(中略) 自分から送るのと、相手から来るのと、どちらの方が多かった印象ですか？

a：メッセージを送信する割合が相手と自分でどちらの方が多いかみたいなだったら半々くらいですかね。

a さんは「私から『いいね』を送ることがほとんどなくて」と言っている。ここから、「いいね」の割合は男性側からされる方が高いと考えられる。一方で、a さんは自分から誘いのメッセージを送信する割合は「半々くらい」と言っている。このことから、女性が

らメッセージを送ることもあり、それは男性側からも受け入れられていると考えられる。a さんの場合は性別役割は観察されていない。

e さん （男性・会社員）

質問者：「いいね」をするのは自分からと相手からだ、どちらが多いですか、「いいね」が来る割合と「いいね」する割合っていうのはどちらの方が多くですか。

e： 8:2 か 7:3 でこっちから「いいね」をしますね。

e さんは「8:2 か 7:3 でこっちから『いいね』」所以说っている、男性が「いいね」する割合が高いことがわかる。課金の仕組みによる性別役割が成立していると思われる。

h さん （男性・学生）

質問者：会うことになるのはどちらから？自分から誘うことが多いか、相手からの誘いが多くって何かありますか？

h：多分、今まで実は会った人は計算してて、14 人なんです。

その中で会おうって言ってくれた人、一人かな、基本的に自分から（声を）かけてるみたいな感じで、多分相手もそのリアクション待ちみたいな感じであると思うんですね。

h さんは女性側から誘われた人数は「一人」と答えている。このことから、男性である h さん自身から提案する傾向があることが読み取れる。また、h さんは女性側も男性から誘われるまで「リアクション待ち」をしていると考えている。ここから h さんは自分から誘うことが必要だと感じており性別役割規範が残っていると考えられる。また、女性側も誘われるのを待っている人もいる可能性が考えられる。

7-2. インタビューから

インタビュー全体を通して、「いいね」をする割合は圧倒的に男性からのアクションが多いことがわかった。これはマッチングアプリ利用者には女性よりも男性が多いことや、マ

マッチングアプリを利用するために課金をしているため、積極性が上がることが考えられる。

その一方で、メッセージに関しては違った傾向が見られた。aさんのように女性側からメッセージを送ることや遊びに誘う例もあった。このように女性側からメッセージを送る事例はaさん以外の回答者からも得られたため、男性からメッセージをすることが必ずしも規範化あるいはマナー化されているとは言えない。また、女性がメッセージを送ることによってマナー違反と捉えられることは無いと考えられる。

8. インタビュー分析② 対面の場合での性別役割

性別役割規範が現れる点として奢る・奢られることへの意識が挙げられると考えた。ここでは、オンライン・デATING内でマッチした後のお金の支払いと交際の申込に関する質問を分析する。

8-1. インタビュー お金の支払い

以下はオンラインデATING内でマッチした後の食事やイベントなど実際にあった際のお金の支払いに関する質問の分析である。下線は筆者によるものである。

bさん （女性・学生）

質問者：会った時に食事とか何か多分あったと思うんだけど、そういう時にお支払いとかお会計とかはどういう感じでやってますか？

b：基本的には割り勘です。

それは単純に私が割り勘がいいというのがあって、今後会うかどうか分からない人に貸しを作りたくないので割り勘を主張するんですけど、この間会った人は25歳でそれなりに稼いでらっしゃる方やかたや私が学生っていうのがあって。

私は割り勘でって強く主張したんですけど、いいからいいからみたいな感じで、お支払いしてくれて、最終的には払ってもらったみたいながあるので、基本的には割り勘でって

主張するし、出すし払うんだけど、向こう側から断られるってことがちょっとありました。

bさんの発言から、bさん自身は割り勘での支払いを望んでいることがわかる。また、「今後会うかどうかわからない人に貸しを作りたくない」と言っている。ここから、割り勘を希望する理由は相手との関係を配慮したコミュニケーションの点からだと考えられ、性別役割を意識した上の行動とは読み取れない。さらに、bさんの割り勘での支払いという提案に対して学生と社会人といった立場、収入の違いがある際には断られる場合もあることが読み取れる。

dさん （男性・社会人）

質問者：会った際にお食事とかどこかに出かけられたりとかすると思うんですけど、その際にお支払いとかは割り勘とか、自分が多めとか、そういう部分で何か意識してることとかこういうことが多いなっていう部分がありましたら、答えていただける範囲で大丈夫ですので伺いたいです。

d：基本的には1回目は全部（全額）どの形態であれ出すようにはしてますね。

それはお昼ご飯であったり晩ご飯であったりカフェであったり、何にせよって感じですね。で、割と結構それこそ付き合うまでは確実に全部出しますし、結構、付き合ってから出すんですけど、向こうがいよいよ、本当に出すよみたいに言ってくれた時は、なんかこっちも甘えて出してもらおうようにとかしますけどっていう感じです。

（中略）

質問者：withとかだとどういふうにお金2人で割り勘にしますかとかその辺聞いて選べるらしいんですけど、そういうのはないですか。

d：Pairsも選べます。私はもう全額出すようにしてます。

初回のデート費用をどちらが出すかでそこは選べるんですけど、僕は一応初回は全額出すにします。

なので、そこをちょっと割り勘しちゃうと嘘ついちゃうことになるので、もちろんそうやることのリスクはあって、ご飯だけ食べに来るような、恋愛あんまり関係ないけど、ご

飯タダ飯だしまいたいな子も必ず来るとは思うんですけど、そこで間口を狭めたくないの
で、そういうご飯だけ食べに来た子とかはメッセージとかである程度判断がつくので、そ
れはそこでシャットダウンしてとかで対策するようにしてます。

dさんは「1回目は全部どの形態であれ」「全額」支払うと言っている。

その理由としては「間口を狭めたくない」ということを挙げている。これは男性が支払う
べきと考えているような性別役割規範を持っている女性の候補から外れないようにする努
力だと考えられる。そのため、本人の規範が内面化しているわけではないと考えられる。

eさん（男性・社会人）

質問者： マッチした方と会った際に食事や何かイベントなどに行かれることがあると思
うんですけど、そういった際に発生するお会計とか代金っていうのは割り勘でされていた
とか、どちらかが多く払っていたっていうことが、もしありましたら、お答えいただける
範囲で大丈夫なので教えてください。

e：基本は私の方が少し多めに払うか全て、全額出すか、8割ぐらいが私の方が多く出して
ますね。あと残り2割は割り勘でっていう形になります。

質問者：それは相手の方は、例えば割り勘にしませんとか言ったりとかするんですか。

e：そうですね。それはよく言われます。払いますよっていうふうに言ってくれるんですけ
ど、そこは別に最初ぐらいはお支払いしますという感じで。

質問者：なるほど、それは年齢が相手の方が下だからなのか、それとも男性・女性で、や
っぱり男性がこの場所は払うよってというのとどっちの意味なんですかね。

e：男性・女性だからっていう感じの私は捉え方で多く払ってますね。

eさんは「男性・女性だからっていう感じの捉え方で多く払っています」と言ってい
る。このことから男性が女性に対して食事を奢るというeさん本人の性別役割規範を反映
し、全額または多めに支払うという方法をとっていることがわかる。

gさん（女性・自営業）

質問者：お会計とかする際は割り勘だったか、自分が多く払ったとか、お相手が多く払ったとか、そういう部分で印象的な出来事がありましたら伺いたいです。

g：そうですね。1件目は、例えばお茶して男性に払ってもらって2件目はコーヒー飲みに行こうみたいな時は、こっちが出しますという感じだったかな。

(中略)

質問者：これは結構こだわりというか、払ってもらったら払おうという気持ちからなのか、それともそういう流れが一般的だったのか？

g：どうなんでしょうでも申し訳ないというか、全部払ってもらってでもちょっとそれは気が引けるなあみたいなのがあったので、2件目、コーヒーくらい出させてくださいみたいな。

gさんの場合、1店舗目の食事の支払いに関しては疑問を持たずに受け入れている。しかし、2店舗目に移動する際には「気が引ける」という理由から全額支払っている。1店舗目での行動から、支払った男性側、gさん両者ともに性別役割規範を内面化していることがわかる。しかし2店舗目では性別役割規範から離れた行動となっている。その理由は気が引けるという相手への思いやりなので役割規範を否定するものだとは言えない。

8-2. インタビューから

まず社会人男性は、マッチした女性に対して食事を奢る傾向があることがわかる。また、eさんは支払いを行うのは「男性だから」と言っている。ここから、オンライン・デーティング内の金銭のやり取りでも性別役割規範が見られることがわかった。さらに、dさんは女性分の支払いも行う理由として「間口を狭めたくない」と言っている。この発言から男性の利用者が多く、女性よりもマッチすることが難しいというアプリの特性上、機会を逃さないという意味合いで支払いを行う場合があることが考えられる。この場合は男性側本人の規範意識による行動というよりも女性側の規範意識を配慮した上での戦略的な行動と考えられる。

女性に関しては学生、社会人に関わらず、割り勘での支払いを希望する人がほとんどだった。しかし、インタビューした全員が奢られる経験をしており、その理由としては性別役割規範や年齢の差から割り勘を断られる例が見られた。

ここから女性よりも男性に性別役割規範が強く残っていると考えられる。今回のインタビューの結果では、男性がより規範意識が強く現れていた。また、男性は女性側の規範意識を配慮する様子も見られたが、その想定とは反して女性側の規範意識は薄いという結果が得られた。その一方で、dさんが「恋愛あんまり関係ないけど、ご飯タダ飯だしまいたいな子」の存在を意識しているように、女性の中でも既存の性別役割規範の立場を戦略的に利用して奢ってもらうことを主目的とする女性も一定数存在することがわかる。

8-3. インタビュー 交際の申し込み

8-3-1. bさん （女性・学生）

質問者：もし告白されて付き合わなかった人がいるなら、その理由とかそういった部分を教えてほしいです。

b：（中略）1回目のデートの最後に私がお付き合いしてみませんかと言ったのが、付き合った経緯になります。その時は相手の人もわりと動揺してたけどいいんですか？みたいな感じでOKしてもらって。

質問者：（中略）動揺。まさか女性から言ってもらえるとは思わなかったのかな？

b：女性からっていうよりは、アプリの定石として3回ぐらい会った時に成立するみたいなのがネットとかだと一般的って言われているがちなので、1回目ですでに決める人いるんだぐらいのあれなのかもしれないですね。

bさんは、自分から交際を申し込んだとしている。また、これに対し相手の人が動揺していた理由として、「1回目ですでに決める人いるんだ」と思われたと推測している。ここから、bさんの交際までの流れでは性別役割規範は見られない。

8-3-2. cさん （男性・会社員）

質問者：（交際の申込は）どちらから？

c: 僕からですね。

質問者: そうですか。そういう予感みたいなありましたか?

c: 予感、待ってくれてるなっていう雰囲気は。自分で言うのもあれなんですけど。

cさんは男性であるcさん側から交際を申し込んだとしている。その理由として「待ってくれているなっていう雰囲気は」感じたとしている。ここで、相手の女性は交際まで相手からの告白を待っているという状況であり、自分から告白するという行動に至っていない。この点は「男性が交際を申し出るものである」という性別役割規範が表れている可能性があると考えられる。

iさん (女性・公務員)

質問者: 付き合った経緯っていうのは何回、会った回数とか、どちらが告白したのかとか、そういうところでお答えいただける範囲で教えてください。

i: 一応3回で、3回目の時には、向こうから言ってもらってちょっと先ほども言ったんですけど、気になるって言われたんで、それでお付き合いした感じですね。

iさんは「気になるって言われたんで、それでお付き合いした感じ」と言っている。ここから、男性側から交際を申し込んでいると読み取れる。しかし、男性側が告白すべきと考えての行動かは読み取ることができない。

8-4.インタビューから

まず、「男性が交際を申し込むべき」という性別役割規範に対して顕著に表れた行動はcさんのインタビューだった。一方で、bさんのインタビューでは女性側から交際を申し込んでおり、性別役割規範は見られない。また、iさんのインタビューからも性別役割規範は読み取ることができなかった。

今回の分析から、交際の申込において、マッチングアプリの機能による効果を比較的受けていないと考えられる。インタビュー内で「アプリで出会ったから」自分から申し込んだ、または相手からの申し出を待ったという回答は得られなかった。そのため、交際の申

し込みに関しては、マッチングアプリの機能から戦略的な対応を取るのではなく、各人の性別役割規範が反映されやすいと考えられる。

9. 結論

9-1. 仮説の検証

今回の分析から、設定した以下の仮説について検証する。

仮説 オンライン上では性別役割が弱くなる。特に女性の性的自主性が強まる。

質問紙調査とインタビューでは、女性の自発的なアプローチが観察されたのと同時に性別役割の残存が見られたため、上記の仮説は完全には支持できない。

9-2. 考察

高橋ら(2023)は、男性のみが課金するマッチングアプリの構造から男性が主導的に活動することが多いとしていた。また、マッチングアプリは男性リーダーシップ役割と女性受動的役割を組み込んで成り立っており、これを強化していると述べていた。これに対し、インタビューの分析から、一部先行研究と異なる結果が見られた。まず、課金している男性が主導的に活動するという点に関しては、インタビューの分析でも「いいね」をする割合が男性の方が圧倒的に多いことなどから先行研究と同様の結果が得られた。その一方で、男性リーダーシップ役割、女性受動的役割の強化に関しては、男性側の性別役割の残存は読み取れたものの、女性の受動的役割の強化は読み取れなかった。

また、課金が男女ともない Tinder を利用している e さんが「男だから」支払いすると答えているため、課金額によるジェンダー非対称性の差は読み取れなかった。そのため、男女の課金額を揃えるといったマッチングアプリのシステムを変えることは性別役割規範を無くすことに必ずしも繋がるとは言えないのではないか。

また、Schmitz (2016)はオンライン・デーティングが典型的な制約的性別役割を逸脱する自由を発動するとしている。アプリのシステムとしては、割り勘を希望するかといった事前質問が存在し、自由となっているようにも感じ取れるが、今回のインタビューでは、男

性に「男だから」奢るという意識が見られたため、完全に性別役割を逸脱する自由があるとは言えない。

さらに Bergström(2022)は男性が主導権を握り、女性を守り、女性のニーズに応えるという性別役割規範の残存があるとしている。それに関して、今回のインタビューから男性側にはこの研究と同様の傾向が見られる。その一方で Bergström が採用しているインタビューの女性のように男性に主導権を握らせたいと考える女性像は本研究のインタビューからは読み取れなかった。また、男性が支払いを行う場合も、本人の性別役割規範以外の動機も考えられる。具体的には、女性側の規範の想定や、アプリを利用する上で支払いをした方が有利に女性と出会えると考えた戦略的な思考からといった理由が挙げられる。ⁱ

第4章 オンライン・デーティングとコンフルエント・ラブ

4 章では、後期近代の特徴の一つとされるコンフルエント・ラブ (Giddens) と近代恋愛の特徴であるロマンティック・ラブに着目し、オンライン・デーティングにおいて、それらがどのようにあらわれているのかを考察する。分析は量的調査（質問紙調査）および質的調査（インタビュー調査）を用いて行った。

主な結果は以下のとおりである。恋愛結婚を主導したロマンティック・ラブにかわって、コンフルエント・ラブが一方向的に進展する後期近代という Giddens の予想には否定的な結果が得られた。また質問紙調査（石原らの 2023 年データ）からは、オンライン・デーティングの経験者（大学生）は、男女ともに、非経験者と比べて、愛情など感情面や交際関係よりも、性行動を重視していること、オンラインの経験者は相手の容姿を重視しているということが明らかになった（フックアップカルチャー）。さらにコンフルエント・ラブの特徴（オンライン・デーティングの経験者は恋愛関係の選択肢を広く持ちたいと考えている）も有していることが明らかとなった。「他にもっといい人がある」という意識はオンラインアプリの利用者で有意に多いことも明らかになっている。

一方でオンライン・デーティングを使用している社会人を中心としたインタビュー調査では、ロマンティック・ラブの特徴である長期的な恋愛志向、結婚志向がみられた。調査票調査では「生涯を独身で過ごすのは望ましくない」、すなわち結婚への強い志向を持っている人がアプリ利用者には多かった。

以上のように、オンライン・デーティングの利用者には、ロマンティック・ラブの存続とコンフルエント・ラブ（フックアップカルチャーを含む）の並列という形で「親密性の変容」が起きている。

1. ギデنزの議論

はじめに、本研究の考察において重要な概念であるギデنزのロマンティック・ラブとそれに続く新しい恋愛の形であるコンフルエント・ラブについて概説する。

ロマンティック・ラブの起源について Giddens は、宮廷の「情熱恋愛」から生じたものとし、18～19 世紀の近代において大衆化したものとしてとらえる。ロマンティック・ラブは、神の超越性に適合した一群の独特な信念や理想を、《情熱恋愛》から作り出していった。悲劇的結末を迎えたり、罪深い行いを煽るかもしれないが、同時にまた世俗的な定めや約束事を打破していく場合もある。このようなロマンティック・ラブは、二つの意味合いを明らかに担っていると Giddens は述べる。ひとつは、相手に思いを注ぎ、理想化することと、もう一つは、将来の展開の道筋を予想し、明示していくことである（ギデنز 1995: 72-73）。

2. ロマンティック・ラブとコンフルエント・ラブ

社会学者の山田陽子(2009)によれば、ロマンティック・ラブの特徴は以下の4点である。

- 1) 自らの意思や感情に基づき、交際相手や配偶者を選ぶ（愛の個人主義）。
- 2) 愛のゴールには結婚がある（恋愛結婚）。

- 3) いったん結婚すれば、配偶者以外の異性と性交渉や親密な交際はしない（性・愛・結婚の三位一体）。
- 4) 一人の人と添い遂げる（関係の永続性）。

これに対しギデنزは、後期近代に入った今日、「ロマンティック・ラブの理想は、女性の性的解放と自立を求める圧力のもとで崩壊する傾向にある」という。そして新しい愛の形態、「コンフルエント・ラブ」(Giddens1992:61=1995:95)が生まれつつあるという。コンフルエント・ラブの特徴は以下の3点である。

- 1) 能動的で対等な関係のもとに、感情をやりとりする。ステレオタイプ化された役割遂行よりも、相互のコミュニケーションを重視し、相手の性格や人間性を知り、理解することに価値を置く。
- 2) 年収の多寡やかいがいしく世話を焼くか否かよりも、相手に対してどれだけ心を開くか、無防備に自分をさらけ出せるかによって愛情を量る。
- 3) 関係の永続性よりも、流動性を特徴とする。相手や相手との関係性に満足しない場合、別れることも大いにありえる（ギデنز 1995:94-98）。

山田はロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへの移行によって、関係の不確定性が増すと述べている(山田 2009:138)。コンフルエント・ラブは流動的であることを特徴としているため、関係の持続性が非常に脆弱である。また、この関係性の持続性をめぐる不安によって、交際相手や結婚相手への不安や迷いが生じることを指摘している(山田 2009:139)。具体的には、現代の恋愛では交際相手や結婚相手を自分自身で選択するため、「本当にこれでよかったのか」、「他にもっと良い人が現れるのではないか」という不安や迷いの感情が生じる（山田 2009:139）。

中西祐子(2018)によると今日、「赤い糸で結ばれたたった一人の相手との一生に一度の恋」のような、究極のロマンティック・ラブイデオロギーはほぼ失われている(中西 2018:41)。また、恋愛の延長線上に結婚があるという近代的な恋愛規範も流動化していると指摘している(中西 2018:41)。

その一方でセックスを結婚制度の中に閉じ込めておく近代家族規範に従属的な考えもいまだに存続しており、現代の若者はロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへと一直線的に移行しているわけではなく、双方が複雑に交差する中で恋愛をしていると指摘している(中西 2018)。このように、若者はコンフルエント・ラブ的な流動的な恋愛をするというイメージが必ずしも当てはまらない可能性も考えられる。

もう一つ注意すべきなのは、多くの論者において、いわゆる刹那的な一夜限りのセックス(ワンナイトラブ、フックアップカルチャー)は、コンフルエント・ラブとは峻別されていることである。一夜限りの刹那的な性交は、感情のやりとりや心を開くことは期待されておらず、コンフルエント・ラブの定義には該当しない。コンフルエント・ラブは、ギデンズらによれば「刹那的な恋愛(フックアップカルチャー)」とイコールではない。アプリへの批判の多くは、アプリのもたらす親密性への変化が、ワンナイトの恋愛の優越になるという危惧である(Illouz 2019)。

しかし3章で述べたように、オンライン・デーティングの利用者は、長期的な恋愛を求めるものが、意外なほどに多い。アプリというオンラインの仕組みが、コンフルエント・ラブとは異なるワンナイトの恋愛ばかりを増やしていくという可能性は高くないのである。以降では、コンフルエント・ラブと刹那的な恋愛は重なる部分が少なくない考える。

3.ロマンティック・ラブの持続

Bergströmによれば、オンライン・デーティングのアプリの制作者側は、このプラットフォームにロマンティックな「運命」などを読み込むような演出をしているという。

オンライン・デートにおける干渉の欠如を主張することは未来のパートナーが第三者の介入なしに出会うという、運命というロマンチックな理想と調和する製品を宣伝する目的を果たす。また、デジタル・プラットフォームはオンライン上の「コミュニティ」であり、ユーザーの総和に過ぎない水平的な自己管理ネットワークであるというイデオロギーを表現している。(Bergström 2022:45)

また、ロマンティック・ラブを内包する結婚が、必ずしも Giddens のように社会において衰えているわけではないといういくつかの議論が確認できた。

さらにそれに付け加えるなら、アメリカの離婚の多い社会において、離婚と再婚を繰り返す人々が結婚のたびに「この人だけ」とロマンティックに考えることが結婚のエネルギーとなっている（Cherlin 2009）。Cherlin は「性的指向に関わらず、ほとんどの若者がロマンティックな愛を受け入れている」とも述べている。ここではロマンティック・ラブが残存し再生しているのは、結婚という制度が影響力を持っているからだということになるだろう。日本では「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」という概念も提出されている。今や恋愛は結婚の十分条件ではないのだが、必要条件になっているというものである。（谷本・渡邊 2016）

これは、お見合い結婚においても恋愛の要素を感じる人が増加している傾向（国立社会保障・人口問題研究所 1998）とも通じている。結婚という制度が持続する場合には、ロマンティック・ラブという要素が必要とされているのである。

以上の議論をここでまとめてみる。コンフルエント・ラブとフックアップカルチャーは共通点もあるが、相違点も少なくない。しかししばしばロマンティック・ラブのオルタナティブとして論者によっては区別されず語られている。

名称	ロマンティック・ラブ	コンフルエント・ラブ	フックアップカルチャー
志向・特徴	<u>永遠のコミットメント</u> 必然的な愛情 受動的 特別な人 代替不可能性 <u>スペック重視</u> 安定	<u>純粋な関係性志向</u> ⇔ 永遠のコミットメント 偶発的な愛情 能動的 特別な関係⇔代替可能 <u>コミュニケーション重視</u> 結果として不安定	<u>短期的な関係志向</u> ⇔ 純粋な関係性 偶発的な関係 自己選択 代替可能 <u>セックス重視</u> 結果として不安定
結婚の理想	<u>結婚</u>	<u>結婚にこだわらない</u>	結婚にこだわらない

	愛情 <u>性＝愛＝結婚</u>	<u>同棲や離婚が常態的</u> 愛情 <u>性＝愛≠結婚</u>	ワンナイト <u>性≠愛≠結婚</u>
ジェンダーバ イアス	<u>ジェンダー不平等</u> <u>家庭生活への隷属</u>	<u>ジェンダー平等</u>	<u>ジェンダー平等</u>
操作的定義	「男性が奢るべき」 「生涯続く結婚を望む」	「他にももっといい人がい る」「恋愛関係の選択肢を広 く持っておきたい」	「愛のないセックスでも構 わない」

表6 ロマンティック・ラブ、コンフルエント・ラブ、フックアップカルチャーの特徴
(出典) 筆者作成

4. 仮説

上記の先行研究における議論をもとに、本研究では以下の仮説を立てた。

仮説 オンライン・デーティングではロマンティック・ラブが減り、コンフルエント・ラブが多くみられる。

5.インタビュー分析 マッチングアプリ利用者の意識

以下のインタビューでは、オンライン・デーティングにおいて当事者が、コンフルエント・ラブとロマンティック・ラブ、フックアップカルチャーをどのくらい意識しているのかに注意しながら質問をした。インタビューは表1のとおりである。なお、下線は筆者によるものである。

5-1.インタビュー マッチングアプリの利用動機

bさん (女性・学生)

質問者：次に、マッチングアプリの利用目的はどのような目的ですか？

b：一番近いのは恋人探し。恋人探して、結婚相手探しみたいなのも若干近いかなっていう感じです。

質問者：結婚っていうものがスコープの中にありますか？自分の中に。

b：そうですね。

人生設計の中で結婚したくて結婚するまでには2、3年くらいは交際したくて逆算していくと、今出会った人と結婚してもいいなって思うのでお付き合いをするってなった時の基準の一個に結婚できる相手かどうかみたいなのがあるので、21歳だからまだ恋人探しではあるけど、結婚相手探しもあるみたいな感じですね。

bさんは「一番近いのは恋人探しで、結婚相手探しみたいのも若干近い」と言っている。ここからオンライン・デーティングの利用動機として結婚を視野に入れていることがわかる。また、「結婚するまでに2、3年くらいは交際した」い、「お付き合いをするってなった時の基準の一個に結婚できる相手かどうかみたいなのがある」という発言から、aさんの場合、最終的な目標は結婚で、長期的な付き合いを希望していることが読み取れる。

dさん（男性・会社員）

質問者：利用目的が何かありましたら伺いたいです。

d：そうですね。やっぱり変遷はあるんですけど、やっぱり今は結婚相手を見つけるっていう目的ですね。

ただその2、3年前というか20代中盤ぐらいだと、どっちかというと、恋人を見つけるとかっていう方向性の方が強かった。

質問者：なるほどじゃあ、その時よりさらに深いお付き合いというか、長いお付き合いとか結婚っていうのを見据えて現在は利用している？

d：そうですね。

dさんは年齢によって利用動機が変化している。インタビューでは現在は若い頃よりも長い付き合いを望んでいることがわかり、その状況においてもオンライン・デーティングをし続けている。ここから、長期的な付き合いや結婚という目的に対してもマッチング・アプリの利用が効果的と考えていると読み取れる。

i さん（女性・公務員）

質問者：ありがとうございます。次にマッチングアプリの利用目的としては、どういう理由から始めようと思いましたが、答えていただけますか。

i：単純にいい人がいればいいなと思って。見つける目的で始めました。

（中略）

質問者：いい人っていうのは具体的なイメージとして、恋人探しているイメージが強いのか、結婚相手探しているイメージが強いのかっていうのはありますか。

i：特には、そうですね。とりあえず、恋人かな、

i さんは「いい人がいればいいな」と言っており、このいい人については「恋人」としている。このことから i さんは自身のパートナーとして、結婚相手ではなく恋人を前提に考えていることがわかる。

5-2. インタビューから

今回のインタビューではオンライン・デーティングの利用目的は全員が恋人探しか結婚相手探しのどちらかであった。ここから、結婚相手を求めている場合、流動性を重視したコンフルエント・ラブよりも永続性を重視したロマンティック・ラブを将来的に求めている人が多いことが考えられる。また、d さんのように、恋人探しの目的で利用し始め、長期的な付き合いや結婚というように変化する中でもオンライン・デーティングを利用している。また、b さんは恋人探しとしながらも、恋人の基準に結婚できる相手かどうかを挙げている。ここからオンライン・デーティングを利用した出会いの延長線に結婚という長期的な付き合いを視野に入れていると考えられる。このことから長期的な付き合いを希望する場合でもオンライン・デーティングを利用している人が一定数存在すると考えられる。

5-3. インタビュー 運命・ときめき

次にオンライン・デーティングを利用して結婚に至ったインタビューに注目して分析する。下線は吉川によるものである。

まず、既婚者である c さん、g さんのインタビューから分析する。なお、c さん、g さんはマッチングアプリ利用を通じて結婚まで至っている。次に未婚者の e さんのインタビューを分析する。

c さん （男性・会社員）

質問者：ちょっと当時思い出して答え願いたいんですけど、マッチングアプリの利用は楽しかったですか。

c：楽しかったですね。

質問者：その場合、その楽しさの要因ってというのはどこにあるんですか。

c：楽しさの要因は自分が本当に真剣な出会いを求めてたんで、そういう人がいたっていうので。

（中略）

質問者：じゃあちょっとある種運命の人だったということですよ。

c：はい。

（中略）

質問者：候補は、どんな感じなんですかね。

c：候補はたくさんいるんですけど、合いそうだなっていう人は意外と少なくて、その時たまたま出会いを探してるからマッチすると思うんで、

質問者：やっぱ、運命的な感じですね。それは

c：そうですね。同時期にやっぱり求めてたっていうのもあったんで。

c さんの発言からアプリを利用する中でも運命的なものを感じる人も存在することがわかる。この要因として c さんのインタビューによると、真剣な出会いを求めている時にお相手の方も同じように真剣な出会いを求めていたという点が挙げられると考えられる。

g さん （女性・自営業）

質問者：次に、マッチングアプリでマッチして実際に会った時に恋愛感情とかときめき感みたいなことを感じた経験はありますか？

g：そうですね。

今の夫と会った時は、写真よりも実際に見る方が良かったので好きになりました。

で、あとの2人はちょっと違ったなあみたいなので、写真とイメージが違うというのでそんなにときめかなかったです。

(中略)

質問者：今お答えいただいたところが、付き合っの流れとか付き合っの期間っていうところを伺ったんですけれども、それに付き合うことに決めた理由などは、お答えいただける範囲で教えてください

g：そうですね。多分、私が好きだったからでしょうか。

(中略)

質問者：運命があるんですね。

g：いろいろ運命を私は感じてましたけど。

gさんは「運命を私は感じてましたけど。」と言っている。ここからオンライン・デेटィングを利用した出会いの中でロマンティック・ラブの特徴に近い恋愛観を持っていることが分かる。

eさん (男性・会社員)

質問者：なんかときめきみたいなの、会って話したりする時にときめいたり、この人でなきゃいけないなんて思ったりしたことありますか。

e：それがあつたからお付き合いをしたっていうことになるんで、そこがなければ多分お付き合いはしてないっていうことになると思います。

質問者：例えばこちらの望んだスペックの方だつたとだからお付き合いしようとかいうのをプラスアルファで何かそういう感情がやっぱりこの人だとか会つてよかった、話せてよかった。そんなようなこととかが多少あつたりしたこともあるんですかね。

e：そうですね。

やっぱり話して楽しいって感じると、やっぱりお付き合いしたいなっていうことになってくるんで、別にスペックがどうこうっていうところよりも会つてからの何かときめきみたいなのの方がお付き合いするには重要な部分になってきてますね。私としては。

eさんは「ときめきみたいなところの方が重要な部分になって」くると発言している。ここから、eさんはオンライン・デーティングを利用した恋愛の中では学歴のようなスペックにまつわる条件よりもコミュニケーションから感じ取ったコンフルエント・ラブの特徴に近いようなときめきを重視していることが分かる。

5-4. インタビューから

オンライン・デーティングの利用によって結婚に至った回答者は共通して「運命的な出会った」と感じている。これはロマンティック・ラブの特徴に当てはまっている。そのため、オンライン・デーティング内での恋愛観・結婚観にもロマンティック・ラブ・イデオロギーは残存している可能性があると言える。

その一方で、未婚の回答者では異なった傾向が見られた。eさんは「会ってからの何かときめきみたいなところの方がお付き合いするには重要な部分」と述べている。ここから、スペックのような条件よりもコミュニケーションを重視している点はコンフルエント・ラブの特徴に近い恋愛観が見られる。

5-5. インタビュー 「ほかにもっといい人がいるかもしれない」

以下は交際相手よりも「もっと他にいい人がいるかもしれない」と考えたという設問に関するインタビュー分析である。下線は筆者によるものである。

dさん（男性・会社員）

質問者：お付き合いしてる間にもっといい人いるんじゃないかっていうのは思われたことってあります？付き合ってる途中に。

d:もちろんありますね。

むしろアプリってそうさせる仕組みになってると思うので、特に1人目マッチングアプリでつき合った1人目の子とか、ほぼそういう理由で別れてるというかだと思えますね。個人的にもうちちょっと自分が結婚したいって思って、恋愛とか続けるんだったら、もうちょっとこういう人がいいなって思いがあって、別れたところは正直あると思う。

ちょっとあんま覚えてないですけど、おそらく女の子側の方が結構その辺シビアに見てるような気がしますけどね、めちゃくちゃ選択してると思います。

dさんは他にもっといい人がいるかもしれないと考えた経験があると言っている。さらに、「アプリってそうさせる仕組みになっている」という発言から、オンライン・デーティングを利用することでもっといい人がいるかもしれないという感情が巻き起こると考えていることがわかる。

eさん（男性・会社員）

質問者：次の質問に移るのですが、今の方だけに限らず、お相手とお付き合いする中でもっといい人がいるかもしれないとかそういったことを考える機会ってというのはあったりしましたか。

e：いや、そういうのはあまり考えないですね。

質問者：付き合ってる方のことを一番に考えるという。

e：そうですねはい。その通りですね。

質問者：ただアプリってすごいいろいろな人を探せますよね。ちょっといわゆる目移りがしちゃうなんていうのはあるんですか。

e：基本的にはお付き合いしたタイミングでアプリはやっぱりやめてしまうんで、なかなか途中で目移りするっていうのはなかったですね。で、やっぱり一からメッセージをやり取りしてお会いしてってなると、結構めんどくさいところがあるんで、私はめんどくさがりなんです。そういうところがちょっとやらなかったらめんどくさくて、付き合ってる最中にマッチングアプリをやるっていうのはやってなかったですね。

gさん（女性・自営業）

質問者：次に今お答えいただいた中で、前ご結婚された方との比較してしまう部分があるとおっしゃっていただいたんですけど、お付き合いする中で他にもっといい人がいるかもしれないとか、そういったことを考えたことはありますか？

g：ありました。

(中略)

質問者：ちなみにもっと他に人がいるかもしれないっていう風に考えるのは、アプリを利用したことで思うようになったことですか?それともそれ以前から考える方でしたか?

g：アプリの影響はあるんじゃないかなと思います。

マッチングアプリやる前ってだいたい知ってる範囲の紹介が多かったので、こういう知らない範囲の人と会えるんだみたいなのはすごい新鮮でしたね。

gさんはもっと他にいい人がいるかもしれないという考え方はオンライン・デーティングを利用したことによって生まれた考え方だとしている。

hさん (男性・学生)

質問者：(中略)付き合ってる中でもっといい人がいるかもしれないとか、そういうふうに考えたことはありますか?

h：内心ありましたね。

並立して話してた人がいるんで、もしそっちを選んでたらみたいなの。そういう世界線のことは考えていたし、実際にそういう世界線の夢を見たんですよ。

そのくらいなんでちょっと浅はかだったのかなって、今の自分では思いますね。

すごいめちゃくちゃ愛してくれたんで、この人がいいなと思ったけど、他の人を選んでたらどういう世界線だったんだろうっていうのはずっと考えている。

hさんは「もしそっちの人を選んでいたら」と言っている。この意識が生まれた理由として、並行して話していた人の存在について述べている。このことから、オンライン・デーティング内のメッセージ機能でやり取りしたことによって、他の選択肢があったかもしれないという考えに至っていることがわかる。

5-6. インタビューから

「もっと良い人が現れるのではないか」という不安や迷いは、オンライン・デーティングの利用により、さらに感じやすくなると考えられる。

この要因として、オンライン・デーティングを利用することによる出会いの増加が考えられる。オンライン・デーティングの利用により、対面で出会うよりも多くの人と出会うことができる。この出会いの母数の変化によって選択肢が増え、「もっと良い人が現れるのではないか」という感情の増幅が引き起こされると考えられる。この感情はコンフルエント・ラブの特徴に当てはまっていると言える。

6. 量的分析(質問紙調査)

6-1. フックアップカルチャーの分散分析（先行研究）

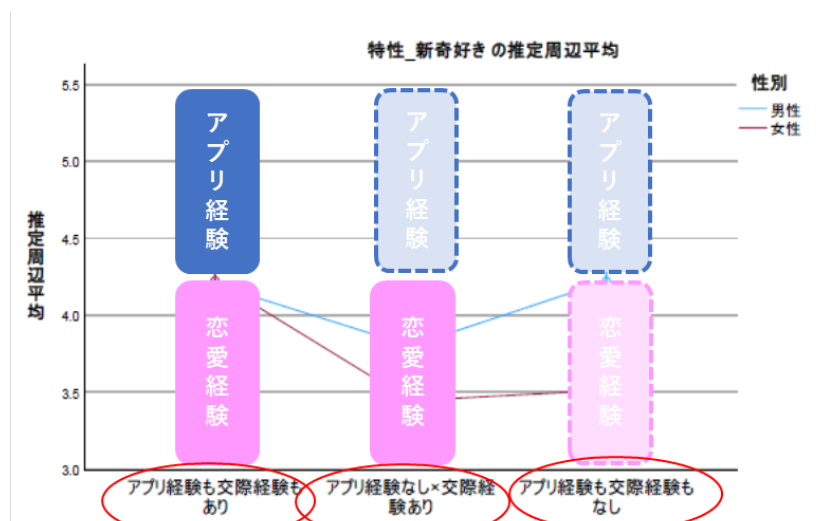
石原らの 2023 年データによれば、フックアップカルチャーに該当する設問についての回答は以下のようなものである。2つの質問はソシオセクシュアリティを尋ねた質問とされる。

「情緒的な結びつきのない（コミットメントのない）相手と性的関係を築く傾向」を、ソシオセクシュアリティ（sociosexuality）と呼ぶ（仲嶺・古村 2016）。これはフックアップカルチャーの測定に適していると考えられる。

- ① まずソシオセクシュアリティの一つの質問として「愛のないセックスでもかまわない」に従属変数として分散分析を行った。アプリ経験（現在あるいは過去にアプリを使用したことがあるものを経験ありとした）も交際経験（0 人の場合交際経験なし、1 人以上の場合交際経験ありとした）もあるグループ、アプリ経験がなく交際経験がある場合、アプリ経験も交際経験もないもの 3 グループにわけて分析を行った（交際経験がなくアプリ経験がある人は分析から除外した）。

回答の選択肢

- 1 全くあてはまらない 2 当てはまらない 3 あまり当てはまらない
4 少し当てはまる 5 当てはまる 6 非常に当てはまる



以下のグラフでは、この3グループを比較
(アプリ経験ありで交際経験なしは少数のため比較からは除外)

図2 本研究で利用した3グループの例示

(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

被験者間効果の検定

従属変数: 愛のないセックスでも構わない

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	54.112 ^a	5	10.822	7.359	<.001
切片	890.932	1	890.932	605.789	<.001
Q55	21.337	1	21.337	14.508	<.001
Q101_b	24.687	2	12.343	8.393	<.001
Q55 * Q101_b	4.393	2	2.196	1.493	.227
誤差	348.555	237	1.471		
総和	1811.000	243			
修正総和	402.667	242			

a. R2 乗 = .134 (調整済み R2 乗 = .116)

表7 「愛のないセックスでもかまわない」を従属変数とした分散分析の被験者間効果
の検定 (出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

多重比較

従属変数: カジュアルなセックスは心地よい
LSD

(I) 3分類	(J) 3分類	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
アプリ経験も交際経験もあり	アプリ経験なし×交際経験あり	1.08 [*]	.217	<.001	.65	1.51
	アプリ経験も交際経験もなし	1.18 [*]	.268	<.001	.65	1.71
アプリ経験なし×交際経験あり	アプリ経験も交際経験もあり	-1.08 [*]	.217	<.001	-1.51	-.65
	アプリ経験も交際経験もなし	.10	.220	.638	-.33	.54
アプリ経験も交際経験もなし	アプリ経験も交際経験もあり	-1.18 [*]	.268	<.001	-1.71	-.65
	アプリ経験なし×交際経験あり	-.10	.220	.638	-.54	.33

観測平均値に基づいています。

誤差項は平均平方 (誤差) = 1.753 です。

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

表 8 「愛のないセックスでもかまわない」を従属変数とした分散分析の多重比較

(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

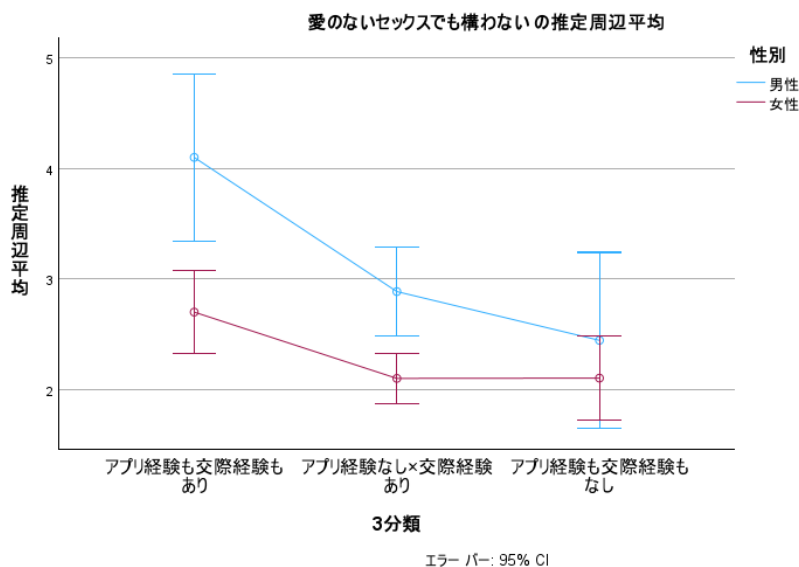


図 3 「愛のないセックスでもかまわない」を従属変数とした分散分析推定周辺平均

(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

男女で有意差あり ($p < 0.001$)、性別と 3 類型に交互作用があった ($p < 0.001$)。男女ともにアプリ経験者は「愛のないセックス」を肯定する傾向がみられた。アプリを利用する男

性が女性よりも肯定的であった。多重比較の結果をみると、恋愛経験ではなく、アプリ経験がある場合に肯定的になることがわかる。

② 次にもう一つのソシオセクシュアリティをみる質問を分析する。「色々な相手と”軽い気持ち”でセックスすることに心地よさを感じたり、楽しんだりする自分を想像できる」

被験者間効果の検定					
従属変数: カジュアルなセックスは心地よい					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	65.766 ^a	5	13.153	7.505	<.001
切片	802.830	1	802.830	458.066	<.001
Q55	13.623	1	13.623	7.773	.006
Q101_b	43.488	2	21.744	12.406	<.001
Q55 * Q101_b	2.306	2	1.153	.658	.519
誤差	415.378	237	1.753		
総和	1726.000	243			
修正総和	481.144	242			

a. R2 乗 = .137 (調整済み R2 乗 = .118)

表9 「色々な相手と”軽い気持ち”でセックスすることに心地よさを感じたり、楽しんだりする自分を想像できる」を従属変数とした分散分析の被験者間効果の検定
(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

多重比較						
従属変数: カジュアルなセックスは心地よい						
LSD						
(I) 3分類	(J) 3分類	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
アプリ経験も交際経験もあり	アプリ経験なし×交際経験あり	1.08 [*]	.217	<.001	.65	1.51
	アプリ経験も交際経験もなし	1.18 [*]	.268	<.001	.65	1.71
アプリ経験なし×交際経験あり	アプリ経験も交際経験もあり	-1.08 [*]	.217	<.001	-1.51	-.65
	アプリ経験も交際経験もなし	.10	.220	.638	-.33	.54
アプリ経験も交際経験もなし	アプリ経験も交際経験もあり	-1.18 [*]	.268	<.001	-1.71	-.65
	アプリ経験なし×交際経験あり	-.10	.220	.638	-.54	.33

観測平均値に基づいています。
誤差項は平均平方 (誤差) = 1.753 です。
*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

表10 「色々な相手と”軽い気持ち”でセックスすることに心地よさを感じたり、楽しんだりする自分を想像できる」を従属変数とした分散分析の多重比較
(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

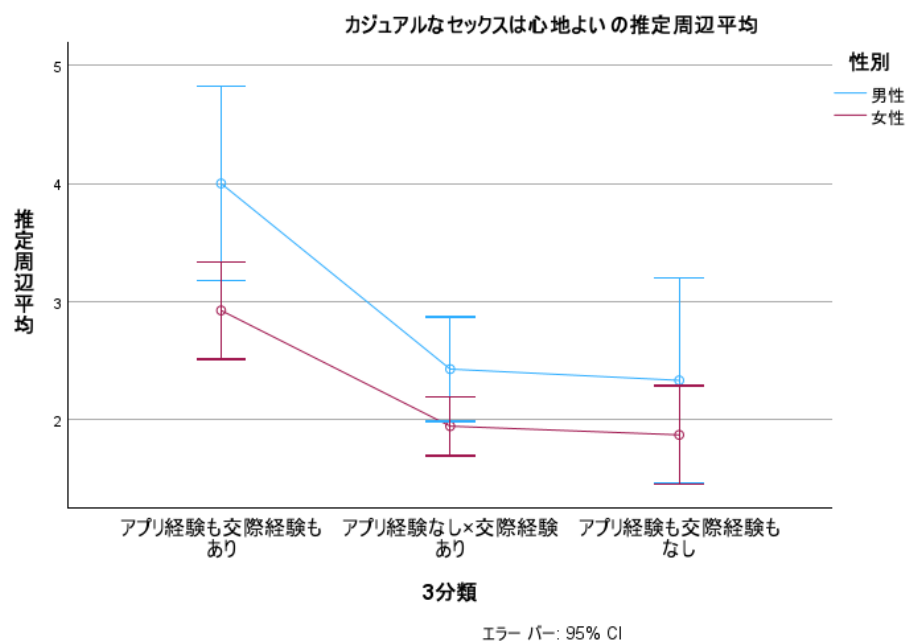


図4 「色々な相手と”軽い気持ち”でセックスすることに心地よさを感じたり、楽しんだりする自分を想像できる」を従属変数とした分散分析の推定周辺平均
(出典) 高橋・石原・山田・鬼頭 (2023)

「色々な相手と”軽い気持ちで”セックスすることに心地よさを感じたり (…)」という設問(「カジュアルなセックスは心地よい」というタイトルにしてある)に対して、3分類($p<0.001$)と性別($p<0.06$)の両方に有意差がみられた。男性の方がこの傾向が強い。多重比較の結果では、アプリ経験がある人は、ほかの2類型よりもこの傾向がみられる($p<0.001$)。オンライン・デーティングの一つの特徴はフックアップカルチャーに他ならないことが明らかになった。

6-2. コンフルエント・ラブの分散分析

「マッチングアプリ大学生質問紙調査」の中の16項目のMaximizerと呼ばれる質問のうち、コンフルエント・ラブの検証に適切と考えた以下3つの質問を分析し、検証する

(Newman, Schung, Yuki, Yamada, & Nezlek, 2018)。ここでの検証は分散分析を利用する。

- ① 私は、現在の恋愛関係を、他のあり得る関係と常に比べている。
- ② 現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。
- ③ 私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。

選択肢はソシオセクシャリティと同様である。まず、「現在の恋愛関係を可能なものと比較する」について、性別×アプリ経験×交際経験の分散分析を行う。

オンライン・デーティング利用経験あり×交際経験ありのグループ、オンライン・デーティング利用経験なし、交際経験ありのグループ、オンライン・デーティング利用経験も交際経験もないグループの3グループを女性と男性に分けて分析した。なお、ここでは石原ら2023年のデータによる先行研究と同様、オンライン・デーティング利用経験あり、交際経験なしのグループはごく少数であるため、比較から除外する。

被験者間効果の検定

従属変数: 現在の恋愛関係を可能なものと比較する

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	28.312 ^a	5	5.662	3.031	.011
切片	1301.055	1	1301.055	696.352	<.001
Q55	.072	1	.072	.038	.845
Q101_b	10.165	2	5.083	2.720	.068
Q55 * Q101_b	7.457	2	3.729	1.996	.138
誤差	442.808	237	1.868		
総和	2962.000	243			
修正総和	471.119	242			

a. R2 乗 = .060 (調整済み R2 乗 = .040)

表 11 「現在の恋愛関係を可能なものと比較する」を従属変数とした分散分析の被験者間の検定 (出典) 筆者作成

多重比較

従属変数: 現在の恋愛関係を可能なものと比較する
Bonferroni

(I) 3分類	(J) 3分類	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
アプリ経験も交際経験もあり	アプリ経験なし×交際経験あり	.71 [*]	.224	.005	.17	1.25
	アプリ経験も交際経験もなし	.68 [*]	.276	.045	.01	1.34
アプリ経験なし×交際経験あり	アプリ経験も交際経験もあり	-.71 [*]	.224	.005	-1.25	-.17
	アプリ経験も交際経験もなし	-.04	.228	1.000	-.58	.51
アプリ経験も交際経験もなし	アプリ経験も交際経験もあり	-.68 [*]	.276	.045	-1.34	-.01
	アプリ経験なし×交際経験あり	.04	.228	1.000	-.51	.58

観測平均値に基づいています。

誤差項は平均平方 (誤差) = 1.868 です。

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

表 12 「現在の恋愛関係を可能なものと比較する」を従属変数とした分散分析の多重比較

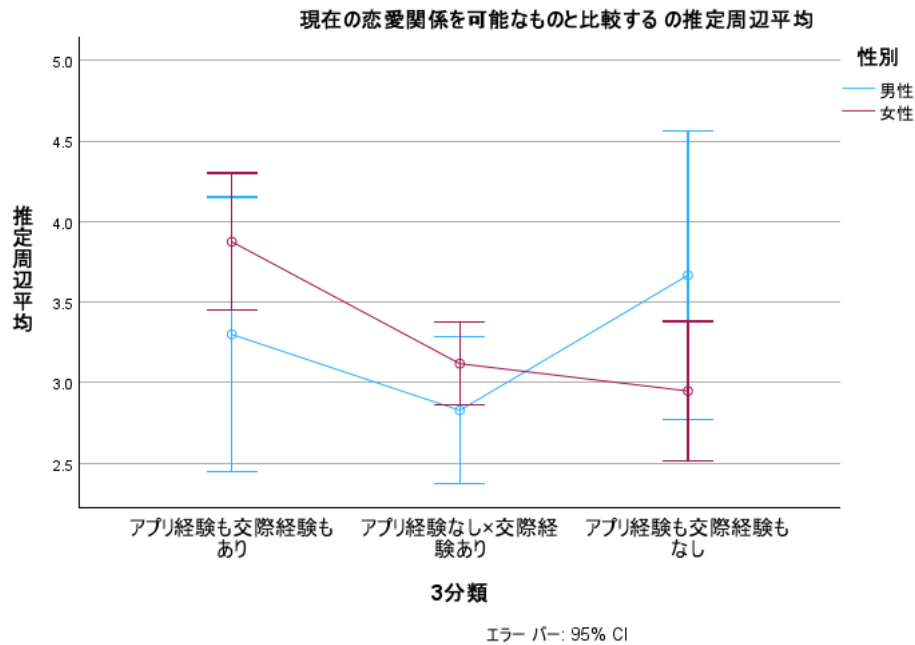


図 5 「現在の恋愛関係を可能なものと比較する」を従属変数とした分散分析
の推定周辺平均 (出典) 筆者作成

多重比較から、オンライン・デーティング利用経験、交際経験ともにあるグループと、どちらもないグループに、回答に関して有意差があった ($p=0.045$)。また、アプリ経験なし、交際経験ありのグループは、どちらも経験あるグループと有意差があった

($p=0.005$)。つまり、アプリ経験（と恋愛経験）をもつグループは他のグループと比べて、他の可能なものと比較するというコンフルエント・ラブの特徴が見られる。

6-3. ロジスティック回帰によるコンフルエント・ラブに関する分析

上記の分散分析の結果からオンライン・デーティング利用とコンフルエントラブの価値観には関連が見られた。ここからはその因果関係の方向性を探るためにロジスティック回帰による分析を行う。

6-3-1. 変数の変換

ロジスティック回帰による分析の前段階として、利用する変数のダミー変数を作成した。まず、性別は男性を0、女性を1としてダミー変数を作成した。また、オンラインデーティング利用経験に関しては、利用経験有無の2分類とし、無しを0、有りを1とした。さらに、交際経験に関しては以下の4分類に再分類し、それぞれのダミー変数を作成した。

交際経験 4 分類

1. 0 人 2. 1 人 3. 2 人 4. 3 人以上

6-3-2. 「私は、現在の恋愛関係を、他のありうる関係と常に比べている。」の分析結果

「方程式中にある変数」の「現在の恋愛関係を可能なものと比較する」に注目すると、有意確率 $p<0.003$ となっている。また、「方程式中の変数」の B に注目すると 0.319 と正の値となっている。ここから、統計的に有意な差があることがわかる。マッチングアプリ利用経験有りと回答した人は無しと回答した人に比べ、「私は、現在の恋愛関係を、他のあり得る関係と常に比べている。」に当てはまると回答した人が多いと言える。

6-3-3. 「現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。」の分析結果

「方程式中に変数」の「より良い関係を探している」に注目すると、有意確率は 0.062 となっている。また、「方程式中の変数」の B に注目すると 0.180 と正の値となっている。ここから、統計的に有意な差はなく、アプリ利用の有無と「現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。」の回答には見られない。

6-3-4. 「私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。」の分析結果

「方程式中に変数」の「別の相手とのほうが幸せ」に注目すると、有意確率は 0.016 となっている。また、「方程式中の変数」の B に注目すると 0.265 と正の値となっている。ここから、統計的に有意な差があることがわかる。マッチングアプリ利用経験有りと回答した人は無しと回答した人に比べ、「私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。」に当てはまると回答した人が多いと言える。

6-3-5. 分析結果

ロジスティック回帰により、「現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。」と「私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。」に有意差が見られた。したがって、この 2 項目に関してはオンライン・デーティングの利用有無の回答と関係があることがわかった。

7. 結論

7-1. 仮説の検証

今回の分析から、設定した 2 つの仮説は以下のように検証できる。

仮説（オンライン・デーティングではロマンティック・ラブが減り、コンフルエント・ラブが多くみられる）については、コンフルエント・ラブ、ロマンティック・ラブが混在していることが観察された（中西の議論が肯定された）。インタビューと質問紙調査ではこれが肯定された。

質問紙調査では、コンフルエント・ラブの特徴と一致する「私は、現在の恋愛関係を、他のありうる関係と常に比べている。」「私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。」(利益最大化行動 Maximizer の尺度 Newman, Schug, Yuki, Yamada, Nezlek 2018) はアプリ使用と回答との相関がみられた。

ただし「生涯を独身で過ごすというのは、望ましい生き方ではない」に関してはアプリ利用者が肯定的、すなわち結婚に重きを置くロマンティック・ラブがマッチング・アプリを利用することで亢進した（あるいはロマンティック・ラブの意識を持つものがより多くアプリを利用した）といえる。

7-2. 考察

今回のインタビューでは付き合っている中で「もっといい人がいるかもしれない」と考えたことがあるかという内容の質問をしている。その中で、多くの人がその考えに同意した。さらに、この「もっといい人がいるかもしれない」という考えはオンライン・デーティングの利用によって引き起こされたという主観的回答も得られた。ここから、山田が述べている「もっと他にいい人がいるのではないか」というコンフルエント・ラブによって引き起こされる関係の不確実性に対する不安を抱えていることが分かる。

一方で今回のインタビューでは、オンライン・デーティングの利用目的として、主に結婚相手探しと恋人探しという回答が得られた。そのため、オンライン・デーティング利用者の中には結婚相手という長期的な付き合いを求めて利用する人も存在し、それはロマンチック・ラブの特徴の一つである愛のゴールには結婚があるという考え方や、愛の永続性に当てはまると考えられる。

ここから、中西の言うように、一生に一度の恋という究極のロマンチック・ラブイデオロギーは現在のオンライン・デーティング利用者には見られなかった一方で、ロマンティック・ラブが完全に消滅したとは言えない。オンライン・デーティング利用者の中にもロマンティック・ラブの残存が見られ、コンフルエント・ラブとの混在が見られると考えられる。Cherlin のいうように、現在の結婚制度が存続する限りは、ロマンティック・ラブはアプリの中でも存続すると思われる。

第5章 オンライン・デーティングと脱埋め込み

この章では「脱埋め込み」という近代の特徴を表す用語を定義し、アプリがこの特徴を持つことを述べる。さらにアプリの「脱埋め込み」が親密性になにをもたらすのか／もたらさないのかを主にインタビューデータにより明らかにする。

主な結果は以下のとおりである。マッチングアプリの利用者の多くは、マッチングアプリ利用の利点として、「アプリを利用しなかったら出会わなかった人と出会えること」という独特のポジティブな感想を持っていた。さらに「脱埋め込み」の副産物として見いだされた共同性意識について、ゲイアプリを切り口に考察したところ、「脱埋め込み」は近代のコミュニケーションの不全を促すというより、一つの選択肢として今後も有力になっていく可能性が示唆された。

1. ギデنزらによる「脱埋め込み」の定義

ギデنز(1993)『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』およびギデنز(2005)『モダニティと自己アイデンティティ : 後期近代における自己と社会』によれば、脱埋め込み (disembedding) とは、「社会関係を前後の脈略の直接性から切り離していく」(ギデنز 1993:47) ことであり、「社会関係を特殊な位置付けの呪縛から解放し、広範な時間-空間のなかに再統合する」(ギデنز 2005: 2)メカニズムである。

脱埋め込みには代表的な2つの類型がある。1つ目は象徴的トークン (Symbolic token) である。この類型の具体例としては貨幣が挙げられる。貨幣は様々な文脈を超えて交換可能である(ギデنز 1993: 43)。2つ目は専門家システムである。これはある種の文脈を超えて専門家に聞くことで信頼を背景として返答が得られるという考え方である。医学などがこれにあたる。

以上が脱埋め込みの典型であり、鉄道や情報技術を含めて多くの例がみられるのだが、今回オンライン・デーティングの場合には、当事者がそれまで恋愛や結婚などであてにしていた家族、友人、学校や職場の人々から切り離されて、恋愛候補者に向けてたった一人で向き合うことになる状態のことである。

2. Bergström による議論

オンライン・デーティングにおける脱埋め込み状態を、Bergström は恋愛のプライベート化と呼ぶ (Bergström 2022: 6)。

1990 年代以降の出会い系プラットフォームの普及は、出会いの「脱埋め込み」の進行に対応している。私はこの言葉をカール・ポランニー(1944)から借用した。それは、それまで普通の社会関係に組み込まれていた一連の活動が、社会から切り離され、自律的な市場圏を形成するプロセスを指す。(Bergström 2022:6)

デートの脱埋め込みとは、パートナー探しにおいて通常の社会的関係を迂回することを意味する。デジタルプラットフォームによって、デートはプライベート化する。(Bergström 2022:8)

詮索されることなく関係が始まり、展開するという事実は、私生活を管理する上でかなりの自律性を与えてくれる。これは通常の社会的状況ではあまり当てはまらない。(Bergström 2022:88)

以上のように Bergström は恋愛のオンライン化 (2 章) の帰結がプライベート化であると強調する。

ここでわれわれは Bergström の「恋愛のプライベート化」は、Giddens のいう「脱埋め込み」と同じであるといってよいだろうか。Bergström は「脱埋め込み」をポランニーから借用したと書いているが、Giddens もこの用語をポランニーから借用している。ポランニーの脱埋め込みは、主に経済的な文脈において市場が社会的な制約から解放されることに焦点を当てる。彼は、経済活動が社会的な関係から切り離されることが、社会の基盤を脅かすと考え。一方、Giddens は脱埋め込みをより広範な社会的プロセスとして捉え、特に情報技術やグローバル化によって人々の相互作用がどのように変化するかに注目する。したがって、Bergström がオンライン・デーティングの説明に用いている「脱埋め

込み」は、ギデنزのそれとほぼ同じであるといつてよい。象徴的トークンと専門家システムをオンライン・デーティングにおいて対応づけると、オンラインでAIを使って高度に標準化し情報化されたマッチング相手のデータを提供するアーキテクチャは、専門家システムに他ならない。情報の信頼性でも管理の点でも信頼を基盤とするシステムである（情報の正確さについては提供する企業によって差があるが）。さらにここではアプリの登録者の情報が信頼できるものがあり（そうでないものもあるが）オンライン化しPC 端末や携帯アプリとして提供されていることで、どの場所においてもアクセス可能な象徴的トークンとなっているといえよう。従って以下の、オンライン・デーティングにおける「脱埋め込み」は、Giddens および Bergström のいう意味で使うこととする。

3. 出会いの社会動向とオンライン・デーティング

ここで一つ注意がある。1章で述べたように、交際相手を見つける環境に変化が起きており、学校や職場での出会いは減っている。異性の交際相手と知り合ったきっかけと、結婚した夫婦に関してのデータもこれを示している（社会保障人口問題研究所 2023）。2015 年から 2019 年の間に「ネット」が急増し男女ともに「職場や仕事で」を上回っていることがわかる。

図表 2-2-4 調査別にみた、異性の交際相手と知り合ったきっかけの構成割合
(恋人または婚約者がいる未婚者)

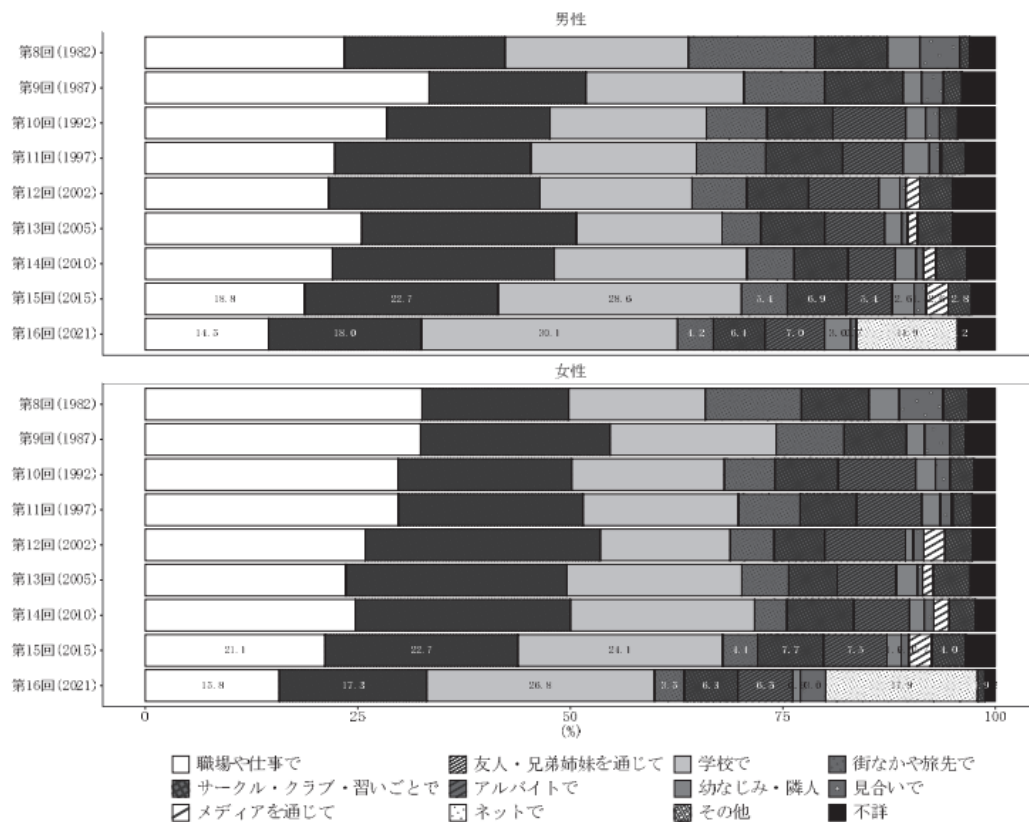


図6 夫婦の知り合ったきっかけ

(出典)社会保障人口問題研究所(2023)

図表 5-2-2 調査別にみた、夫と妻が知り合ったきっかけの構成割合（調査時点より過去5年間に結婚した初婚どうしの夫婦（第16回は過去6年間の結婚））

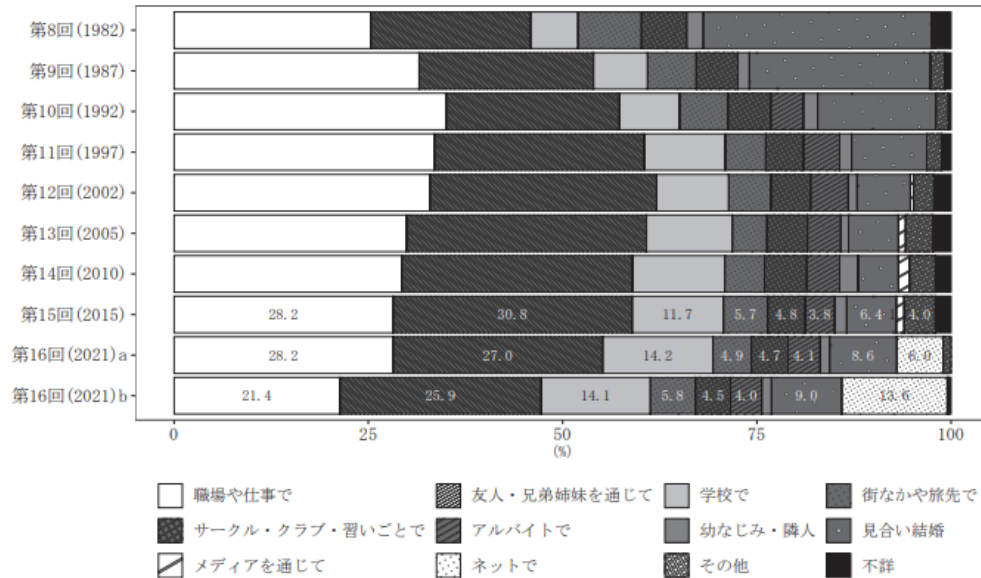


図7 夫婦の知り合ったきっかけ

(出典)社会保障人口問題研究所(2023)

このような状態を前提として、オンライン・デーティングが、無視できない規模での恋愛のプライベート化を推し進めているといえるのではないだろうか。以下では、オンライン・デーティングの脱埋め込みの効果について、データに基づいて仮説の検証を行う。

4. 仮説

先行研究から今回以下の仮説を立てる。

仮説1 マッチングアプリ使用者は、従来の恋愛の場に不満を持っている。

仮説2 脱埋め込みの効果として、性愛に限らない出会いの期待が生じる。

5. 量的調査（質問紙調査）

オンライン・デーティングという脱埋め込みを選択する人は、従来の出会いでは十分な恋愛が可能ではないと思っているのではないか。これを質問紙調査で探索した。

石原らの 2023 年データでは、3 類型×性別を独立変数にして、2 つの説を従属変数として分散分析を試みた。恋愛関係流動性尺度と呼ばれる。関係流動性とは、個人を取り巻く特定の社会又は社会状況に存在する対人関係の選択機会の多寡のことである。北米諸国や大都市などの高関係流動性社会とは、新たな出会いの機会が多く用意され、個人が自由な対人関係を形成したり解消したりする機会が豊富な社会を指す（山田・鬼頭・結城 2015）。

被験者間効果の検定

従属変数: 周囲の人_新しい恋人を見つける機会ない

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	11.191 ^a	5	2.238	2.212	.054
切片	1396.243	1	1396.243	1379.767	<.001
Q55	.868	1	.868	.858	.355
Q101_b	7.046	2	3.523	3.482	.032
Q55 * Q101_b	1.363	2	.681	.673	.511
誤差	239.830	237	1.012		
総和	3086.000	243			
修正総和	251.021	242			

a. R2 乗 = .045 (調整済み R2 乗 = .024)

表 13 「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、新しい恋人を見つける機会があまりない」を従属変数とした分散分析の被験者間効果の検定 （出典）筆者作成

多重比較

従属変数: 周囲の人_新しい恋人を見つける機会ない
LSD

(I) 3分類	(J) 3分類	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
アプリ経験も交際経験もあり	アプリ経験なし×交際経験あり	.39*	.165	.019	.06	.71
	アプリ経験も交際経験もなし	.47*	.203	.022	.07	.87
アプリ経験なし×交際経験あり	アプリ経験も交際経験もあり	-.39*	.165	.019	-.71	-.06
	アプリ経験も交際経験もなし	.08	.168	.630	-.25	.41
アプリ経験も交際経験もなし	アプリ経験も交際経験もあり	-.47*	.203	.022	-.87	-.07
	アプリ経験なし×交際経験あり	-.08	.168	.630	-.41	.25

観測平均値に基づいています。
誤差項は平均平方 (誤差) = 1.012 です。
*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

表 14 「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、新しい恋人を見つける機会があまりない」を従属変数とした分散分析の多重比較 （出典）筆者作成

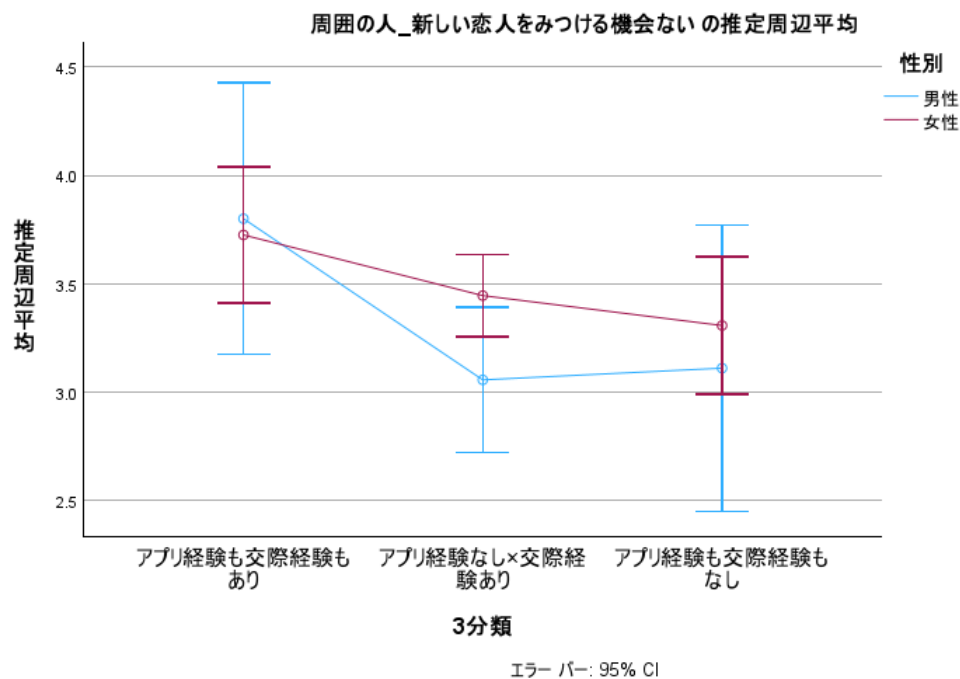


図 8 「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、新しい恋人を見つける機会があまりない」を従属変数とした分散分析の推定周辺平均 （出典）筆者作成

表 16 は、「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、新しい恋人を見つける機会があまりない」という「想像」を答えてもらっている。すなわちこの回答の数値が高いほど、自分

の周囲の関係流動性が低いという認識である。そしてアプリ経験も恋愛経験もない類型、恋愛経験はあるがアプリ経験のない類型よりも、有意にこの意識を持つのが、アプリ経験者である。日本における恋愛や結婚の場として、特に職場がネットにとってかわられていることは、女性のコネ入社と社内恋愛が多かった社会風土が、社員として女性が働くようになると、うかつに付き合うこともできなくなったという事情もあるだろう。

もう一つの設問「彼らには、恋人として付き合う異性を自由に選べないことがよくある」への回答は次のようになる。

被験者間効果の検定

従属変数: 周囲の人_恋人を自由に選べない

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	11.928 ^a	5	2.386	2.225	.053
切片	1017.324	1	1017.324	948.967	<.001
Q55	2.722	1	2.722	2.539	.112
Q101_b	8.069	2	4.034	3.763	.025
Q55 * Q101_b	9.868	2	4.934	4.603	.011
誤差	254.072	237	1.072		
総和	2141.000	243			
修正総和	266.000	242			

a. R2 乗 = .045 (調整済み R2 乗 = .025)

表 19 「彼らには、恋人として付き合う異性を自由に選べないことがよくある」を従属変

数とした分散分析の被験者間効果の検定 (出典)筆者作成

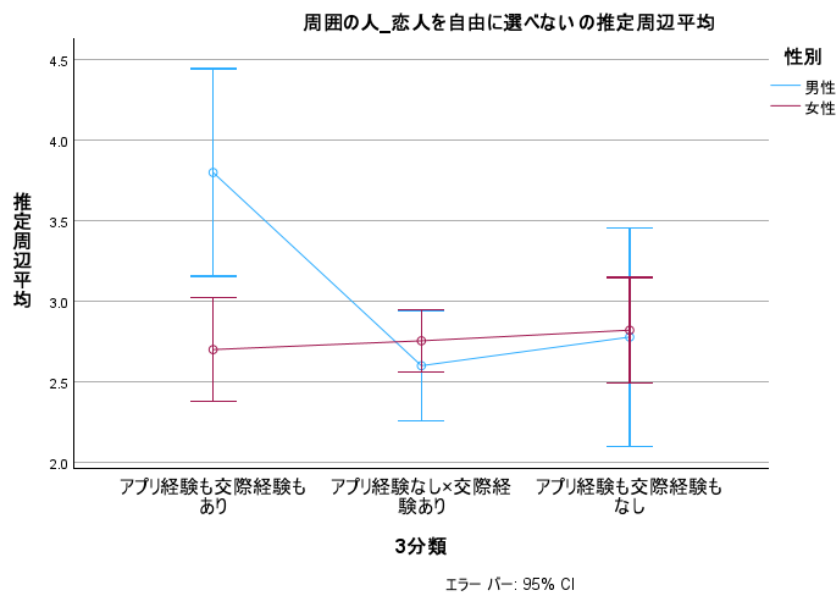


図9 「彼らには、恋人として付き合う異性を自由に選べないことがよくある」を従属変数とした分散分析の推定周辺平均 (出典)筆者作成

この場合も、アプリ経験のある類型の回答の数値が有意に高くなっている。

以上より仮説1の「マッチングアプリ使用者は、従来の恋愛の場に不満を持っている」は支持されたといえる。

5-1. 仮説2 恋愛ではない「ときめき」とは何か

宮田(2024)はオンライン・デーティングの利用で恋愛への「ときめき」が増加している可能性に言及している。ここで宮田が「アプリを利用しなかったら出会わなかった人と出会えること」という部分も恋愛に含めているのには以下述べるように首肯できない。石原らの2023年データによると図10のように、特に女性で、性愛ではなく「友人をつくるため」という回答がみられるのに注意したい。その理由は以下のインタビューから明らかになる。

マッチングアプリをどのような目的で利用していましたか
(6点=非常に当てはまる、平均点)

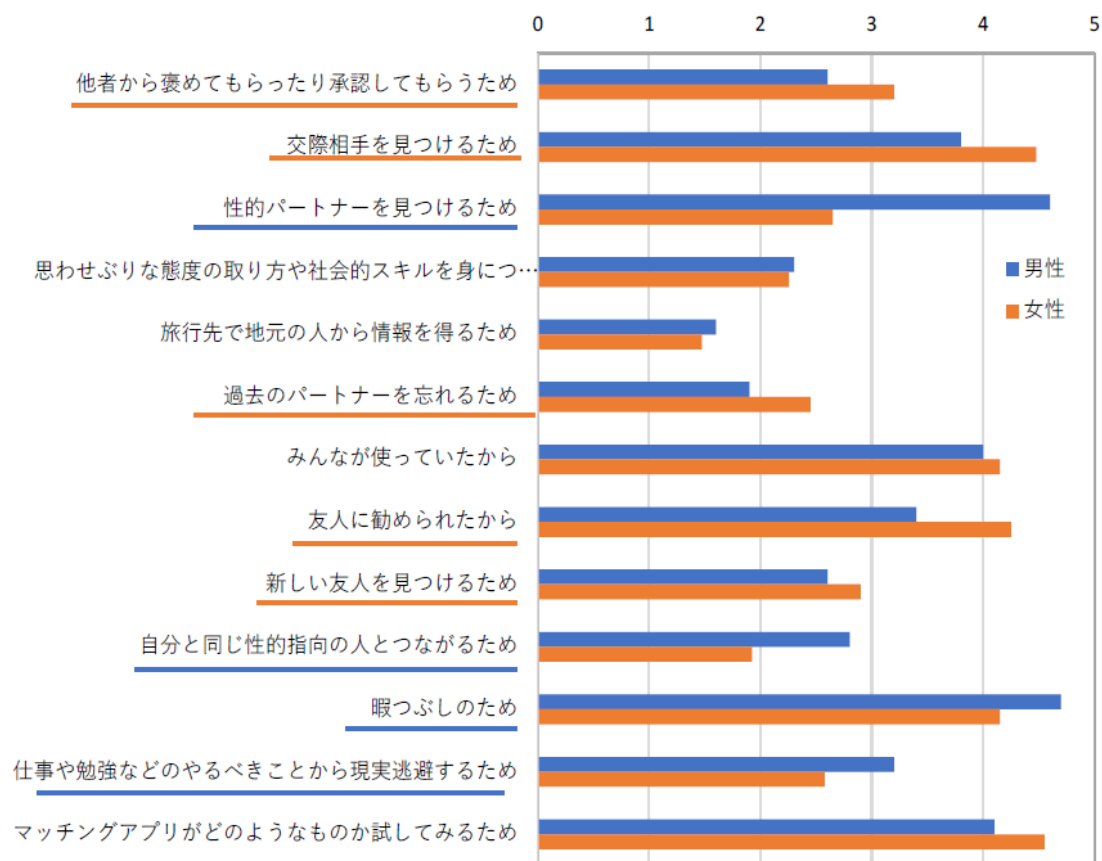


図 10 マッチングアプリを使う目的

(出典) 石原・鬼頭・高橋・山田 (2023)

5-2. 仮説2 「アプリを利用しなかったら出会えなかった人と出会える」という回答の意味

以上のように、「脱埋め込み」の前提となるような、現在の恋愛環境への不満のある人がマッチングアプリを利用していることが明らかになった。

「脱埋め込み」に関連する当事者の表現として、「アプリを利用しなかったら出会えなかった人と出会える」というものがある。この回答を取り上げる理由は二つある。一つは以下のクラスター分析であり、もう一つは2024年11月に明治学院大学社会学部「コミュニケーションの社会学」受講者に行った質問紙調査のデータによる（n=188）。

ここでは、アプリ利用者およびアプリ非利用者双方に、「もしもあなたがマッチングアプリを利用する場合、『ときめき』を感じるとしたら、この中のどの項目がその対象だと想像しますか。（複数選択可能）」という10質問を用いた。

質問内容は先述した宮田（2024）の質問紙調査を参考にし、さらに自由連想した回答から以下の10項目とした。この項目に関して、学生288人にオンラインで複数回答をしてもらった。

- Q1. 相手と自分との間に共通項が見つかること
- Q2. 数多くの人に出会えること
- Q3. 相手との出会いに運命を感じることに
- Q4. 属する組織や集団に左右されず自由にふるまえること
- Q5. 相手の第一印象が回数を重ねて良い方向に変わっていくこと
- Q6. トライアンドエラーを繰り返して、アプリ利用が良い方向につながることに
- Q7. アプリを利用しなかったら出会えなかった人に出会えることに
- Q8. やりとりする相手に安定した将来性を感じることに
- Q9. 最初からすぐに恋愛の対象が見つかることに
- Q10. 別れても次の人がすぐ見つかることに

宮田の調査（2024）では一番目にあげた回答「アプリを利用しなかったら出会えなかった人に出会えること」が一番多くなった。しかしこの結果はプライマシー・バイアス（primacy bias）の可能性があるため今回は質問の順番を変えた。

その結果やはり最初の項目「相手と自分との間に共通項が見つかること」の回答が一番多くなってしまった。しかし、2番目が「アプリを利用しなかったら出会えなかった人に

出会えること」であったため、この設問が「ときめき」に関して重要であることはかわらず示されたといえる。

次にこの回答の傾向をみるために、クラスター分析を行った。クラスター分析は、データを似た者同士でグループ分けするための統計的手法である。

階層型クラスター分析は、データを階層的にグループ化していく方法で、デンドログラム（樹形図）を用いて視覚的にクラスターの関係を示す。この手法では、最初にクラスターの数を決める必要がなく、後から適切な数を選ぶ。

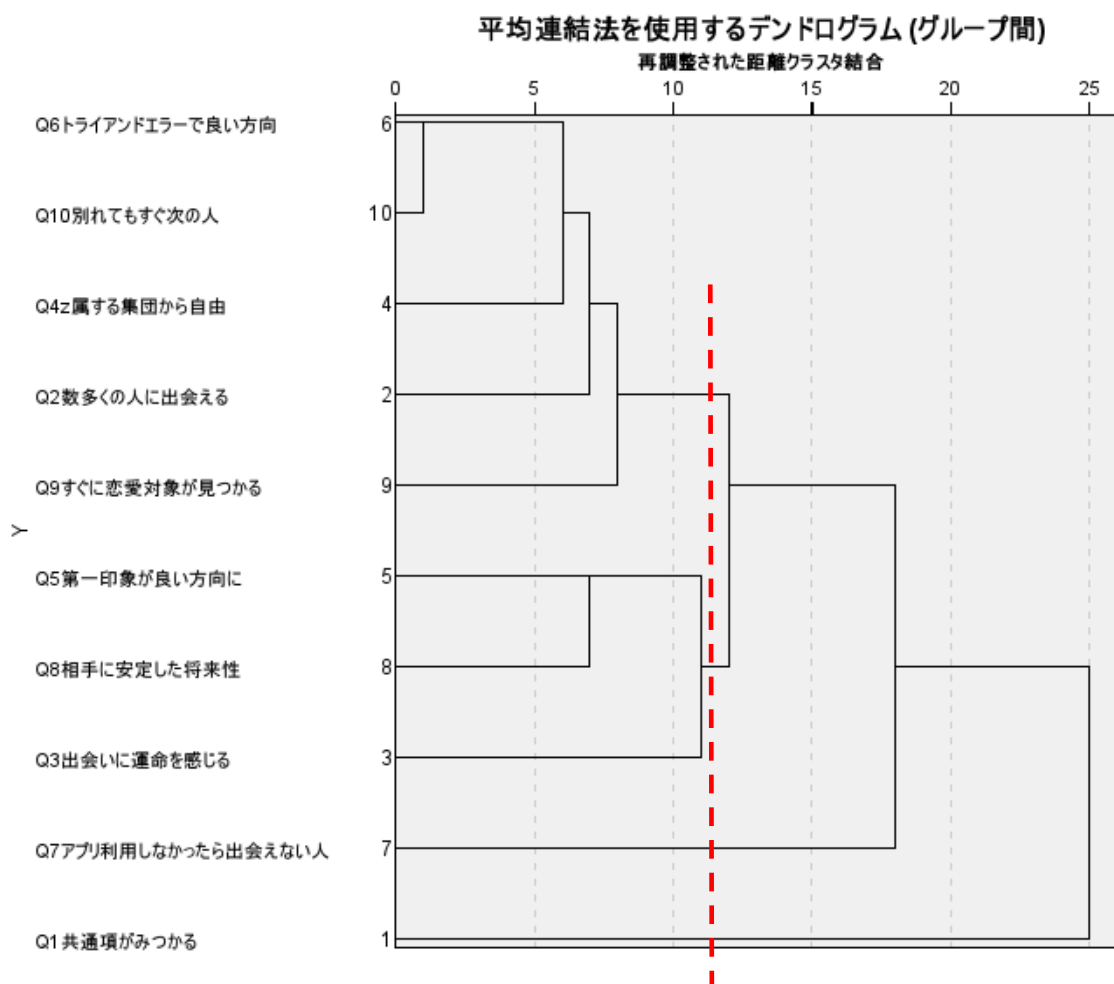


図 11 平均連結法を利用するデンドログラム (出典)筆者作成

出た結果は図 11 であり、赤の点線で4つのクラスターにわけることにする。

Q6、Q10、Q4、Q2、Q9 のクラスターは、現在の文脈から自由で、＜カジュアルな恋愛＞がオンライン・デートにおける「ときめき」であるとするものである。「脱埋め込み」がもたらす、一つのイメージの塊である。

Q5、Q8、Q3 のクラスターは、第一印象がよい方向に変わる、相手に安定した将来性を期待する、出会いに運命を感じるなど、＜ロマンティック・ラブ＞にときめきを感じるクラスターである。

これ以外には、Q7 アプリを利用しなかったら出会えなかった人に会えることにときめきを感じるのが一つのクラスター、もう一つが回答が一番多かった Q1「相手と自分の間に共通項が見つかること」、であり、先に述べたようにこの回答はプライマシー・バイアスの可能性があるので分析では注意が必要である。

この分析から考えられるのは、ロマンティック・ラブやカジュアルな恋愛（フックカルチャー）にときめきを感じる人たちだけでなく、多くの人々で、必ずしも恋愛とは限らない「出会えなかった人に会えること」という回答や、特に多い「相手と自分の間に共通項が見つかること」という長期的なコンフルエント・ラブを意味する回答があげられる。

この分析から、恋愛とは必ずしも限らない回答として、「アプリを利用しなかったら出会えなかった人に会える」という回答の意味を以下では考えていく。

6. インタビュー分析 マッチング・アプリ利用による脱埋め込みの効果

6-1. インタビュー 「普段では出会えない人と出会える」

以下は、マッチングアプリ利用の中での利点を聞いた際に多くの回答者から共通して得られた結果をまとめたものである。なお、下線は筆者によるものである。

a さん 女性・会社員

質問者：アプリを使っていて良かったことは何ですか？

a：良かったことは、世の中にはこういう男の人がいるんだっていうのを、いろんなことを知れたっていうのと、それまで付き合ったことがなかったのもあって、デートしたりとかロマンチックな行動をすることに一定憧れがあったんですけど、別にこっちの気が乗ってないときにデートしたりとかしても、別にそんなに面白くないんだなっていうのを学べた

というか、理想として頭の中にあったようなものが一回壊れてちゃんと現実に戻ってこれたので良かったなと思いました。

今までの経験の中では出会っていない男性と出会う機会になったことやデートに対する憧れがなくなったことをオンライン・デーティングを利用したことの利点として挙げています。ここから、オンライン・デーティングはaさんにとって脱埋め込みの概念に近い利点があったと考えられる。

bさん 女性・学生

質問者：次に、マッチングアプリの利用が楽しいか楽しくないかっていうことは、どちらでしょうか？

b：割と楽しいが強いです。（質問者：どういうところが楽しい？）一つはやっぱり本当に関わりが、普通に生きてたら関わらなかっただろうなみたいな人たちといっぱい話せるので、単純に恋人作る作らない以前にいろんな人と話せるのが楽しいなっているのがあります。

（中略）

質問者：いろんな人と出会えるっていうのは出会ってっていうのはまた、別のアドベンチャー、冒険みたいな感じ？

b：どういう感じなんだろう？最近の私としては、恋愛的っていうより、アドベンチャーの方が強くて、本当にいろんな人と話せて楽しいなみたいなのが強いです。

bさんはオンライン・デーティングの利用が楽しかった要因として「普通に生きてたら関わらなかっただろうなみたいな人たちといっぱい話せる」ことを挙げている。またこれは恋愛的な楽しさではなく、人と出会う冒険的な意味合いが強いとしている。

eさん 男性・会社員

質問者：アプリ利用は、楽しいと感じますか。

e:割と自分は楽しいと思う方ですね。

それこそちょっと言い方が悪いですけど、クエスト感があるというか、傾向と対策がちゃんとあって、ミスったからうまくいかなかったから、次こうやって改善しようとかっていうのはできるし、あと何より話のネタになるっていうのも結構あるし、あとはいろんな人に会えるっていうのが、個人的にはすごくいいなと思うところですね。

本当に普通だったら出会えなかったような人たちとなんか割と会えたので、それこそ YouTuber さんとかなんか銀座のホステスさんとか、本当に今自分のコミュニティだけでは絶対出会えない人とかに出会えたりするので、そこはすごく個人的にはマッチングアプリで恋愛目的じゃないそういうコミュニティが今後もあればいいのになって思います。

e さんはオンライン・デーティングの利用の魅力を「クエスト感」と表している。クエスト感があると感じる理由として「傾向や対策」を立てることができることなどを挙げていることから、恋愛的な要素と自己目的の要素が含まれていると読み取れる。

これらの回答以外にもオンライン・デーティングを利用することの楽しさ、良さに関する質問から以下のような回答を得た。

f さん 女性・会社員

質問者：マッチングアプリは楽しいですか。

楽しい場合、その楽しさの要因はどこにあると思いますか。

f：楽しさはなんか波長が合う人とマッチングしたときはなんかちょっとワクワクするなって感じですね。

ちょっと仕事っぽくなりますけど、この人と最短でスムーズに会えるようにするには、次どうメッセージを送ろうかなみたいな考えたりします。

質問者：面白いですね。そういうワクワク感は楽しいと、

f：そうですね。この言葉引き出すためにこれ送ってみて、それが来たら。

gさん 女性・自営業

質問者：直感的にお答えいただきたいのですが、アプリ利用は楽しかったと感じましたか？

g：そうですね。

質問者：楽しさの要因ってというのはどこにあると考えてますか？

g：本当に自分の今までの領域じゃない人と会えるっていう新鮮さが良かったと思います。

ここでgさんは「自分の今までの領域じゃない人」と出会えることへの新鮮さを述べている。これはオンライン・デーティングを利用しなければ得られない、特有の楽しさだと捉えられる。

iさん 女性・公務員

質問者：たくさんの人がいるっていうことに、ドキドキしたとか、ときめきを感じたみたいな部分はありますか。

i：多くの人に出会えることをすごい良いことだと思った。でも確かに楽しさではありました。いろんな人と普通に生きてたら出会えない人たちはいた。良い経験だったかなと。

6-2. インタビューから

オンライン・デーティングの利用の楽しさの要因に関する質問に対して、多くの人から普段出会えない人との出会いの喜びの回答が得られた。ここから、オンライン・デーティングには学校や職場など埋め込まれた環境にはない出会いが存在することが考えられる。また、そのような出会いはオンライン・デーティングを利用する人にとって楽しみや利用する動機にもなり得ると思われる。一方で、bさんは「恋愛的っていうより、アドベンチャーの方が強」と発言しており、eさんはオンライン・デーティングの楽しさを「クエスト感」と表現している。このことからオンライン・デーティング利用で生まれる楽しさは本来の目的である結婚相手探し・恋人探しとは必ずしも繋がっていない場合もあることが今回の分析からわかった。ここから、オンライン・デーティングの利用による脱埋め込みは、利用における大きなメリットである一方で、主目的である結婚・恋人相手探しに必ずしも関連するとは言えない。

したがって、今回の分析からマッチングアプリ利用者は恋愛的な「ときめき」を感じる場合があることがわかった。それとともに恋愛ではなく、多くの人と出会えるという意味合いでの「ときめき」や「クエスト感」も多くの利用者が感じる利点として挙げられると考えられる。

しかしアプリを使用することで、恋愛ではないが、未知の繋がりを意識させる意図せざる結果となっていることは注目できよう。

7. 共同性の発見 砂川(2022)による研究

砂川(2022)はゲイ向けオンライン・デーティングの利用経験者について分析をし、ゲイの可視化の衝撃を論じている。

ゲイアプリを初めて利用した時の印象について尋ねた質問への回答には「こんなにもたくさんゲイがいる」というものが多く見られた(砂川 2022:48)。ここから、今まで出会いにおいて匿名性が高かったゲイにとって、オンライン・デーティングの登場はお互いを可視化するきっかけとなった(砂川 2022:48)。この結果がハッテン場やゲイバーといったさまざまな場所でゲイと出会っている幅広い年齢層から得られたことは、ゲイアプリの持つ特徴とそれをもたらした影響を考える上で重要である。ハッテン場やゲイバーへのアクセスが困難なゲイの人たちにとってアプリは、性的な出会いのためであるだけでなく、ある種の連帯性をも担保するようになったという。

これも、先に述べた意図せざる繋がりとともに、従来のゲイアプリでは予定されていなかった、ゲイの連帯性を見ることができる。

8. LGBT におけるオンライン・デーティングの普及率 Bergström による研究

Bergström(2022)はLGBT人口におけるオンライン・デート普及率の高さに言及している。アメリカでは、バイセクシュアルとホモセクシュアルの半数以上がオンライン・デーティングや出会い系サイトを利用したことがあると回答している(Bergström,2022:58)。その割合は55%に上り、ストレートと自認する人の28%に比べて利用率が高いことがわか

る(Bergström,2022:58)。この結果に関して、Bergström は新しいことではないとしている。この根拠として、ゲイやレズビアンは歴史的にマッチングサービスの大口利用者であり、インターネットがその傾向を強めたことを挙げている(Bergström,2022:58)。

ゲイの Grindr や 9Monsters は非常にセックスを強調したマッチングアプリだといわれている。しかしゲイがこの空間から、Tinder などの異性愛アプリにおいて、脱セクシュアル化した出会いを求めていることが観察されている (Mackee 2016)。次の砂川氏のインタビューも、性愛のみの空間からの（しかし同性愛関係は持続したままの）距離がみてとれる。

9. 砂川氏へのインタビュー

先行研究に関連して、ゲイアプリにおける「可視化の衝撃」に関して追調査を行うこととした。そこで今回、砂川秀樹氏へのインタビューを行った。なお、インタビューは 2024 年 10 月 22 日で明治学院大学ボランティアセンターで実施したものである。以下はそのインタビューの一部であり、下線は筆者による。

砂川氏：長いパートナーがいても、アプリはまたちょっとセックス探しだったらちょっとした遊びとしてやってる人もいるし、友達募集の人もいるし、そう決めずに恋愛募集とかセックス募集、友達募集とか決めずに誰かと出会いたい。それがどうなるかはさておき、やっぱり出会いが楽しい。誰かと会うことが楽しい。

私自身が彼氏もいて、アプリも登録して使ってるんだけど、何か探してるっていうよりも、帰属感かな。

何か最初に言ったように周りいっぱいいるんだ。コミュニティまでは感じないんだけど、いろんな人たちがいる、そこに私もいる。

いろんな帰属感が私はどっちかと言えば欲しい方で、だからそんないろんな人と会うわけじゃないんだよね。

彼氏ができてから多分会ったことはないかな。

(中略)友達も含めてコミュニティほど強くはないけど、その中にいる感じがある。

砂川氏は「どうなるかはさておき、やっぱり出会いが楽しい」と言っている。ここで「どうなるか」という発言はオンライン・デーティングで出会った人とどのような関係の深さになるのかということを指している。恋愛要素に限定せず、人との出会いに楽しさを見出す部分は同性愛のオンライン・デーティング利用者と共通している傾向だと考えられる。

また、オンライン・デーティング利用の動機として「帰属感」を挙げている。

オンライン・デーティングの機能である位置情報の表示が関係していると考えられる。日常生活の中でもゲイの存在が可視化されることで、仲間がいるという安心感を覚えていると考えられる。コミュニティほどの強さではないが、アプリの「脱埋め込み」という性質が、ゲイにとっては繋がりを可視化させることになり、異性愛者にとっては繋がりの無限の広がりを感じさせることになっている。

これは、メタバースのゲーム（ナイトフォートなど）におけるコミュニティの自己増殖と比べることができる（三宅 2023）。

さらに、アプリ以外の婚活ネットワーク（結婚相談所）の合コンで、終了後に男性同士、女性同士が「反省会」という名目で懇親を深めることなどが、これも多くは組織の仕様ではない場合に自生しているという。ⁱⁱ

10. 結論

10-1. 仮説の検証

この章では以下の仮説を検証した。

仮説 1 マッチングアプリ使用者は、従来の恋愛の場に不満を持っている。

仮説 2 脱埋め込みの効果として、性愛に限らない出会いの期待が生じる。

仮説 1 に関しては、質問紙調査から、現状の恋愛の補完を期待する人たちがオンライン・デーティングに参入していることが明らかになった。

仮説2に関しては、脱埋め込みの意図せざる効果として、性愛に限らない未知の出会いやコミュニティが生まれる期待が生じていることがインタビューや、ゲイアプリの研究から明らかになった。

オンライン・デーティングの利用の楽しさの要因として、今回インタビューを行った多くの回答者から普段出会えない人との出会いに関連する回答が得られた。オンライン・デーティングの特徴として Bergström が指摘しているプライベート化は実際に起きており、利点として生かされていることがわかった。また、「傾向と対策がちゃんとあ」という発言から、オンライン・デーティングでの出会いを掴み取るため、戦略的に利用している様子が窺える。一方楽しさの要因が「クエスト感」や「アドベンチャー」と表している回答者がいることから、プライベート化された空間が必ずしも恋愛の進展に効果があるとは言えないと考えられる。

また、宮田（2024）はオンライン・デーティングの利用で恋愛への「ときめき」が増加している可能性を述べていた。これに対して、インタビューから一部異なる解釈が得られた。インタビューからは宮田が行った「ときめき」に関する調査と同様にオンライン・デーティングを利用していなければ出会えなかった人との出会いがときめきにつながるという結果が得られた。しかしこの「ときめき」は、恋愛という意味合いではない可能性もあることが今回の分析から明らかになった。bさんの「単純に話すのが楽しい」、eさんの「クエスト感がある」という発言では恋愛的な楽しさには言及していない。そのため、オンライン・デーティングを利用する上での「ときめき」はワクワク感や冒険的な意味合いでの「ときめき」が強いと考えられる。

さらに、砂川氏へのインタビューから、オンライン・デーティング利用における帰属感を見出した。砂川氏は同性愛者向けのオンライン・デーティングの利用の動機として「帰属感」を挙げていた。これは先行研究にあるように同性愛者向けオンライン・デーティングの登場により性的マイノリティが可視化されたことと関連があると考えられる。位置情報機能やプロフィールの記入による可視化から日常でも周りに自分と同じ境遇の人が多く存在することを確認できるようになったと考えられる。このことにより、「こんなにいい」という「帰属感」を保持できる手段としてオンライン・デーティングの利用継続がなされると考えられる。

終章 考察

1. 本研究の目的と結果

本研究の目的は、オンライン・デーティングから後期近代の様相を調査することであった。その中で、性別役割規範、コンフルエント・ラブを代表とするような親密性の変容、コミュニティ形成の変容の3点に焦点を当て分析を行なった。

まず、オンライン・デーティング内の性別役割規範においては、男性リーダーシップの残存と戦略的思想からの規範の残存が見られた。コンフルエント・ラブに関しては、ロマンティック・ラブと混在して存在していると考えられる。

コンフルエント・ラブに関しては、従来の議論よりも明確に、ロマンティック・ラブの残存が確認された。同時にフックアップカルチャーも一定の存在がみられる。これらがどのように分布しているのかについての考察は今後に行いたい。

脱埋め込みは、自由な恋愛空間を作ったといえるが、社会全体でみられる従来の文脈の恋愛からの撤退傾向を穴埋めできるかどうかはわからない。しかし無視できない規模でかつての恋愛空間を代替しうることは確認できた。また性愛に限らないネットワークやコミュニティへの希求がデータから伺われ、ゲイアプリにみられる状況が一般化する可能性も示唆された。

2. 本研究の意義

本研究の意義として、以下の2つを挙げる。

まず、後期近代におけるコミュニケーションの複雑化の明示である。本研究全体を通して、特徴を一概に言い切れない分析が多くあった。ここから、既存の規範や定義にとどまらない思考や戦略が広まっていると考えられることを示すことができた。

また、マッチングアプリに対する「軽いつながりを求めるもの」というイメージ以外にも利用方法が存在することが示すことができたと考える。それは、利用者の真剣な交際への意欲や恋愛以外のつながりへの期待から読み込むことができる。さらに、脱埋め込みの効果として、マッチングアプリを利用する上で恋愛関係に留まらないつながりや帰属感の獲得が挙げられる。

3. 本研究の問題点・課題

本研究の問題点は2つ挙げられる。

まず、限定的な調査範囲である。インタビュー調査は主に20代から30代の回答者に限定されていた。さらに上の世代にインタビューを行うことでさらなる知見が得られると考えられる。また、質問紙調査に関しては、明治学院大学での授業内で行なったものであり、インタビュー調査よりもさらに限定的な対象範囲となっている。

次に、質問紙調査における分析である。本研究ではマッチングアプリ利用者とコミュニケーションに関わる設問の関連を読み取ることはできたが、因果関係の方向を読み取ることができなかった。

4. 今後の検討課題

今後の検討課題として以下を挙げる。

- ① 40代以上のマッチングアプリ利用者へのインタビュー調査
- ② 広範囲での調査票調査の実施
- ③ マッチングアプリ利用とコミュニケーションの因果関係の分析

謝辞

指導教員の石原英樹先生には、終始ご指導を賜りました。加えて、2023 年「マッチングアプリ大学生質問紙調査」（調査設計者：石原英樹・鬼頭美江・高橋幸・山田順子）の使用許可を頂きましたこと御礼申し上げます。また、2024 年インタビューを受けていただいた匿名 9 名の方々および明治学院大学砂川秀樹先生に感謝いたします。

参考文献

- 浅井亮子,2008,「ジェンダー意識の固定化装置としてのオンラインマーケティング」『日本情報経営学会全国大会予稿集』57,pp.33-36.(2008年6月7日)
- Bergström,M., 2022, *The New Laws of Love: Online Dating and the Privatization of Intimacy*, Polity.
- チャン・リクサム,2021,「マッチングアプリ文化におけるネットワーク化された性的公衆の出現」国際ジェンダー学会2021年大会シンポジウム「デジタル時代におけるジェンダー、セクシュアリティ、親密性」
- Cherlin,J.A.,2010, *The Marriage-Go-Round:The State of Marriage and the Family in America Today*, Knopf Doubleday Publishing Group.
- Cooper and Sportolari, 2015 “Romance in cyberspace: Understanding online attraction,” *Journal of Sex Education and therapy*, 22:7-14.
- Finkel E.J., Eastwick, P.W., and Sprecher,S., 2012, “Online Dating: A Critical Analysis From the Perspective of Psychological Science,” *Psychological Science in the Public Internet* 13(1),pp.3-66.
- Illouz, E., 2019, *The End of Love: A Sociology of Negative Relations*, polity.
- 石田浩,2023,「オンラインによる出会いと夫婦の性別役割分業：東大社研若年・壮年パネル調査を用いた分析」『第33回日本家族社会学会大会自由報告(3)⑨結婚・夫婦』
- 藤村ひかる・福井康貴,2020,「匿名の異性との出会いと信頼：マッチングアプリにおける相互行為に着目して」『名古屋大学社会学論集』41,pp.59-87.
- 古村健太郎・松井豊,2020,「マッチングアプリの利用とリスクのある性交経験との関連」『地域未来創生センタージャーナル』6,pp.15-25.
- ギデンズ,A.,1995,『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』（松尾精文・松川昭子訳）而立書房.
- ギデンズ,A.,1993,『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』（松尾精文・小幡正敏訳）而立書房.

- ギデンズ,A., 2021, 『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』（秋吉美都他訳）筑摩書房.
- 羽瀧一代,2016,「1 章 21 世紀初頭の若者の意識」羽瀧一代編『現代若者の幸福：不安感社会を生きる』恒星社厚生閣,2016
- 羽瀧一代,2022a,「第 9 章 出会文化の変遷：マッチングアプリの利用にいたる途」,林雄亮編『若者の性の現在地：青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』勁草書房.
- 羽瀧一代,2022b,「マッチングアプリ利用の現在：アーリーアダプタの属性とその傾向」『メディア研究』102,pp.5-20.
- ハキム, K., 2012, 『エロティックキャピタル：すべてが手に入る自分磨き』（田口未和訳）共同通信社.
- 原口伶泉・竹鼻ゆかり,2019,「マッチングサービス・アプリの大学生の利用実態と影響要因」『東京学芸大学紀要』71,pp.151-162.
- 林雄亮, 2018,「青少年の性行動・性意識の趨勢」林雄亮編『青少年の性行動はどう変わってきたか：全国調査にみる 40 年間』ミネルヴァ書房, pp.10-35.
- Hobbs,W.R., Burke,M., Christakis, N.A., & Fowler, J.H., 2016, Online social integration is associated with reduced mortality risk, PNAS113(46),pp.12980-12984.
- ホックシールド,A., 1990, 『セカンド・シフト：第二の勤務 アメリカ共働き革命』（田中和子訳）朝日新聞出版.
- 堀内進之介,2024,「出会い系アプリは『純粋な関係性』を棄損するか？：『愛のアルゴリズム化』批判の再考」『東京女子大学社会学年報』（12）,pp.1-13.
- 国立社会保障・人口問題研究所,2023,『出生動向基本調査 2023』国立社会保障・人口問題研究所.
- 石原英樹・高橋幸・鬼頭美江・山田順子,2023,「出会いメディアから見る親密な関係形成の現在——マッチングアプリ利用者調査 2022 の結果から（1）」第 96 回日本社会学会大会.
- 金子慎太郎, 2017, 「オンラインデーティングにおけるマッチングの分析と予測」『映像情報メディア学会誌』71(5),pp.618-621.

- 木谷幸広・河口和也,2021,「マッチングアプリ『9monsters ナインモンスターズ』における
ゲイの身体変容：リアル・スペース『ゲイバー』への影響」『広島修大論集』
61(2),pp.1-17.
- 木村絵里子,2016,「6章『情熱』から『関係性』を重視する恋愛へ：1992年,2002年,2012
年調査の比較から」藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代編『現代若者の幸福：不安社会を生
きる』恒星社厚生閣,pp.137-168.
- 木村絵里子, 2021, 「1980年代、『non-no』の恋愛文化：現在を対象化するために」『現代
思想』9月号,pp.91-100.
- 木村絵里子, 2024, 「「男性はデート代をおごるべきか」「おごり規範」と性別役割の近未来
像とは」Forbes 2024.12.05号 <https://forbesjapan.com/articles/detail/75419>
- 厚生省人口問題研究所,1988,「第9次出産力調査（結婚と出産に関する全国調査）：第I報告
書一：Volume I：日本人の結婚と出産」.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1998,『日本人の結婚と出産－第11回出生動向基本調査
第I報告書』国立社会保障・人口問題研究所.
- Lawson,H.M. & Leck, K.,2006, “Dynamics of internet dating,” *Social Science Computer
Review*, 24(2),pp. 189-208.
- MacKee, F., 2016, “Social Media in Gay London: Tinder as an Alternative to Hook-Up
Apps,” *Social Media+Society*, pp.1-10.
- 三宅陽一郎, 2023, 「メタバースを支える技術」『電子情報通信学会 通信ソサエティマガ
ジン』17(3)pp.207-.
- 宮田明音,2024, 「マッチングアプリにみる後期近代の恋愛観―「ときめき」と「代替可能
性」に着目して」明治学院大学社会学部社会学科 2024 年度卒業論文.
- マイナビ,2023,「婚活実態調査 2023」
(https://www.recruit.co.jp/newsroom/pressrelease/2023/0921_12627.html)2025.1.9 閲
覧.
- マイナビウーマン,2023,「マッチングアプリとは？ 仕組みやメリット・デメリット、安
全性を解説」(<https://woman.mynavi.jp/article/210721-5/4/#anchor-2>)2025.1.9 閲覧.

- 永田夏来・大杉直也,2019,「若者における恋愛と結婚研究の動向：2010 年以降の議論を中心に」『家族研究年報』 44,pp.77-88.
- 中西祐子,2018,「現代大学生恋愛事情：ロマンティック・ラブ/コンフルエント・ラブ/草食化」『ソシオロジスト：武蔵社会学論/武蔵社会学会 編』 20(1),pp.31-47.
- 仲嶺真・古村健太郎, 2016, 「ソシオセクシャリティを測る：SOI-R の邦訳」『心理学研究』 87(5), pp.524-534.
- Newman, D. B., Schug, J., Yuki, M., Yamada, J., & Nezlek, J. B. ,2018, “The negative consequences of maximizing in friendship selection,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 114(5), pp.804-824.
- 大坂瑞貴,2022,「若者のマッチングアプリ利用と恋愛・結婚観」『現代行動科学会誌』 38,pp.11-20.
- Schmitz,A., *The Structure of Digital Partner Choice*, Springer, 2016.
- 消費者庁,2021.12,「マッチングアプリの動向調査」
(https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/meeting_materials/assets/internet_committee_220121_0002.pdf)2025.1.9 閲覧.
- 高馬京子,2022,「日本のメディアで構築される異性愛恋活・婚活マッチングアプリの利用者という女性像の表象」『国際ジェンダー学会誌』 20,pp.28-42.
- 高橋幸・石原英樹・鬼頭美江・山田順子,2023,「『効率のいい恋愛』という新たな経験の諸相—マッチングアプリ利用者調査 2022 の結果から (2) —」第 96 回日本社会学会大会
- 谷本菜穂・渡邊大輔,2016,「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考：恋愛研究の視点から」『理論と方法』 31(1),pp.55-69.
- タークル, S., 2018, 『つながっているのに孤独:人生を豊かにするはずのインターネットの正体』(渡会圭子訳) ダイヤモンド社.
- 東京都,2025,「東京都結婚支援ポータルサイト TOKYO ふたり STORY」
(<https://www.futari-story.metro.tokyo.lg.jp>)2025.1.9 閲覧.
- 砂川秀樹 ,2022,「日本のゲイアプリをめぐる多様な経験」『国際ジェンダー学会誌』 2,pp.43-51.

- Whitty, MT., 2008, "Liberating or debilitating? An examination of romantic relationships, sexual relationships and friendships on the Net," *Computers in Human Behavior*, 24(5):1837-1850.
- W. Hao, S. Luo, A. Klettner, T. White and K. Albritton, 2023, "Gender Roles in the Millennium: Who Pays and Is Expected to Pay for Romantic Dates?" *Social and Personality Psychology*, 123(2), pp.791-811.
- 山田順子・鬼頭美江・結城雅樹, 2015, 「友人・恋愛関係における関係流動性と親密性：日加比較による検討」『実験社会心理学研究』 55(1), pp.18-27.
- 山田陽子, 2009, 「恋愛の社会学序説：“コンフルエント・ラブ”が導く関係の不確定性」 (10), pp.133-144

i オンラインの結婚相談所へのインタビュー（naco-do 成松美里氏との私信）によると、最初の男女へのインストラクションでは、お見合いの場合、最初は男性が奢ること、女性は二回目にお礼の品を男性に渡すことが推奨されるという。ここではコミュニケーションの継続が潜在的な機能となっており、性別役割は型式にすぎず、規範となっているのではない。

ii こうした恋愛相談のネットワークの類似性、オンラインコミュニティの類似性に関しては今後の研究の課題としたい。